支那文化史蹟

月報
第一號

昭和十四年十月五日印刷
昭和十四年十月十日發行
編輯印刷發行人　西村七兵衛
東京市神田區神保町一
法藏館
振替東京二五四一番
電話神田三四二八番

童子寺を求めて

常盤大定

太原府を西南に距る五十清里の古唐村晉祠は山西省の名所で、古來文人墨客の杖を曳いた處である。晉祠は實に住心地がよかつた。懸甕山を背にして、堂宇廣壯、人情淳撲、加ふるに北支には珍らしい清水が滾々と涌き出でゝ盡く時がない。遠く三代以來の奥ゆかしい歴史を背景として模範村の名を肆にしてゐるのである。此處を宿所として石壁山玄中寺にも詣した。天龍山にも登つた。此間、還つて晉祠に宿するのは、故郷にも還る氣持である。到底堪へ得られぬ程の粗食に疲れては、いつもこゝの宿に枯腸を癒すのである。

久しく念願としてゐた童子寺の場所も漸くにしてつきとめることが出來たし、また氣立のよい老人、楡次縣生れの姚讓と呼ぶ東道者も得た。「太原縣志」祀典の條下に、童子寺に就いて次の様に記してゐる。

北齋天保七年宏禮禪師建、時有二童子、見於山有大石似世尊、遂鐫佛像、高一百七十尺、因名童子寺、前建燃燈石塔、高一丈六尺、後鑿二石室、以處衆僧。

巡禮者の心をそゝる記事である。然し容易にその有處が確められなかつたのである。曾て關野博士も、その有無すら不明の爲に踏査を斷念したといふ。予は是非にと思ひ、愈々童子寺址を求めて出立した。

懸甕山の麓を北方に途を取り、明仙峪を越えて、臥虎山に登り、次いで龍山に登つて、明仙峪を隔てゝ、指顧の間にある明仙寺の跡や、唐相裴休が、晩年退隱したといふ白雲村を眺めながら、脚にまかせて頑石を踏みくだき、荆棘を掻き分けつゝ、之を覺しき方向に突き進んで行くばかりであつた。

すると意外や眼前に昊天觀といふのが現はれ、こゝに他に比類なき道教石窟を發見したのである。山門には無極天尊と榜して奥ゆかしいが、本殿は既に燒失して廢墟を殘すのみ。東西兩廂に多くの道像があるけれども、拙劣見るに足らぬ。四方開放して人影がない。之を過ぎて一岫を廻らんとするところに、四個の洞窟があり、その壁に銘文が刻せられてある。これが、全眞教の祖師の故跡として、北京の白雲觀には及ばずとも、之と肩を並ぶべき程に全眞教にとつて由緒ある場所であつたのである。蒭蕘や雉兎の往來にまかせて何百年以來世間から埋もれてかへり見る人も無い道教石窟を偶然にも發見することの出來たのは、まことに不思議な因緣と云ふべきである。童子寺を求め求めて無暴に近い山越へをしたばかりに、ゆくりなくこの收穫を得たのである。しかし石窟内の銘文を拓しやうにも一滴の水も得られず遂に一枚も取り得られなかつたことは遺憾であつた。

詳細の調査は後日として此處を去り間もなく童子寺を俯瞰する峯にとり附

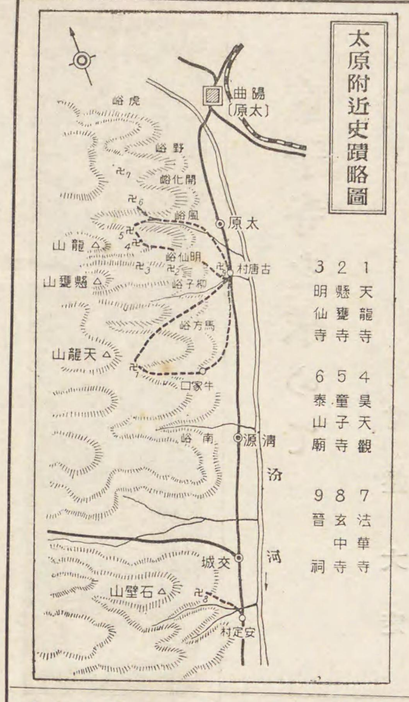
童子寺址燃燈石燈

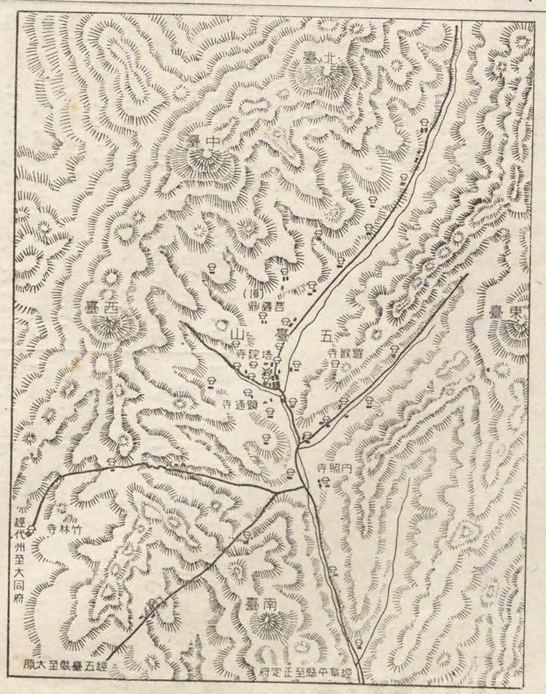
いた。なる程分らぬ筈である。頽廢して見る影もない廢墟にすぎぬ。然し一百七十尺の石佛はないだらうかと境内を漁つた。四窟あるが、壁の一部に小坐佛の並列せる陽刻の少しと、首のない二三の石佛などあるばかりで荒涼を盡してゐる。最右方の巨巖下に至つて見れば、その中央に觀音の立像が端嚴の裝をもつて造顯せられてゐる。大佛像は影も形もないが、その庭前に支那には珍らしい大石燈がある。これ「府志」の燃燈石塔であらうから、一百七十尺の釋迦佛は、たしかに觀音の立像が中空に立つ場所にあつたものであらう。崩壞し盡して何の痕跡をも殘さぬ迄になつたのである。

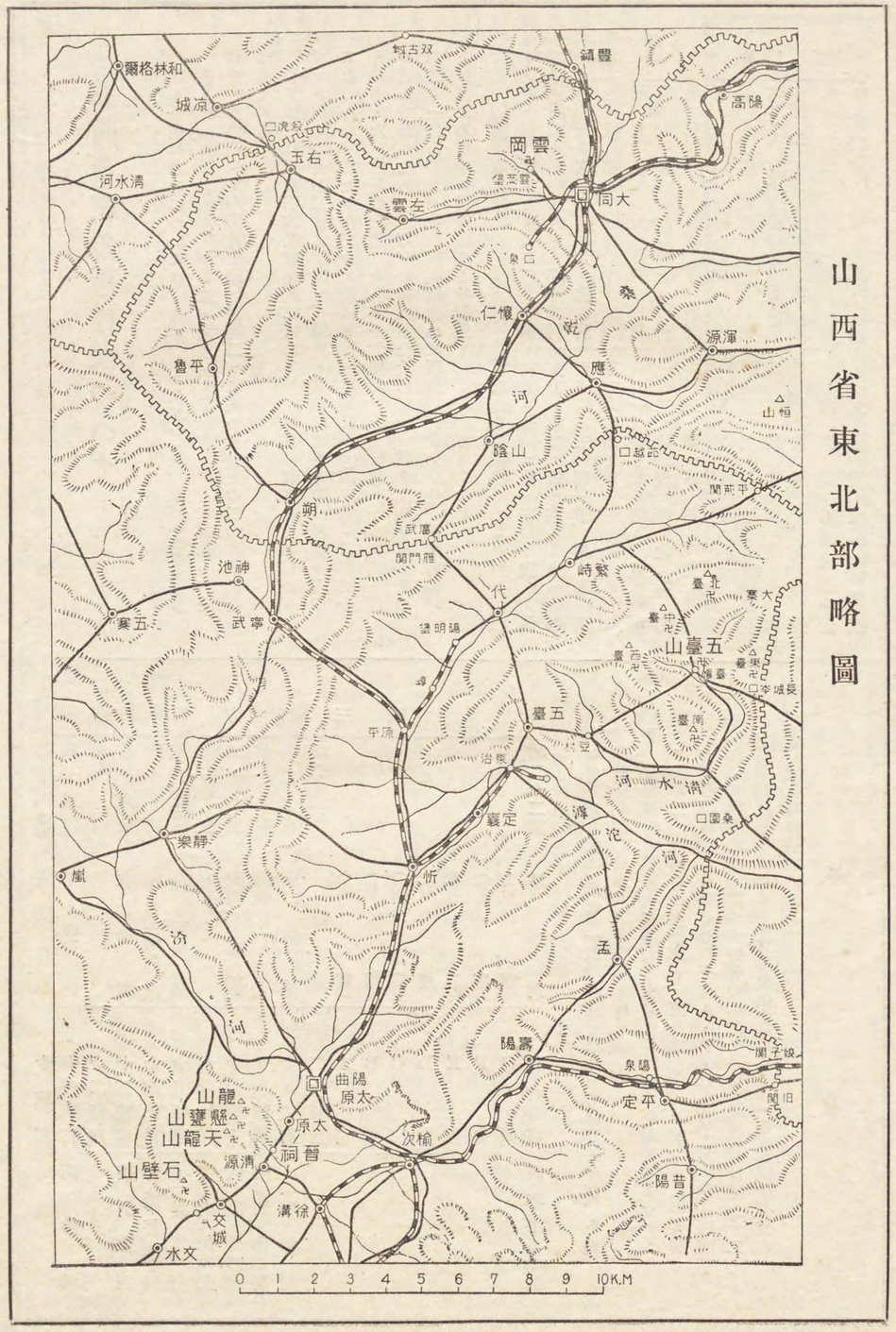
童子寺趾で二つの面白い事例に出會つた。一は尊勝陀羅尼の六角經幢である。早や磨滅して、僅の文字を殘すのみであるが、其一角の下部に、同じく倒に尊勝陀羅尼と刻してある。是れは卽ち初代の陀羅尼の字が磨滅するに及んで、其まゝ幢を利用して、倒に二代目の陀羅尼を刻したのである。如何ほど柔かくとも石は石である。初代の字が磨滅して二代目の經が刻せられたといふことで、この經幢の如何に古いかを知らしめるのである。二代目の經幢は明代のものであらう。他の一は、無殘にもその近邊の土塊中に半埋れてゐた大鐵佛の頭である。よく見れば鐵佛に厚さ二寸程の塑を蓋ひ、之を觀音像と爲してゐる。この造り換へもまた明代であるに相違ない。この例は雲岡石佛にもある。明以後の補修は、概ね厚い塑を蓋ひ、又は彩色して原形を隱して仕舞ひ時に塑の破れから立派な石佛が露見することがある。この觀音も同樣である。抽惡な觀音の面皮が破れて、その中から唐代以上の釋迦佛の骨肉があらはるゝとは頗る奇拔である。この佛像の頭は甚だ重く、到底擧げ得られぬ位であつたが、首のみ殘して體軀は如何になつたのであらうか。明代の補修が早や斯る頽廢に達して居るのであつた。

ここより山を下りて更に風峪の泰山廟に上り、下りて風洞洞に至り、夜に入り石刻華嚴經を拓して晉祠の宿に戻つた。此日行程三十六清里。時に大正九年十一月一日である。

× × × ×







雲岡石窟の稱呼について

雲岡石窟の名稱については、從來、シャヴンヌ氏（E. Chavannes, "Mission Archeologique dans la Chine Septentrionale"）に據るものと關野・常盤氏（『支那佛教史蹟』評解二）に據るものとの二つが專ら行はれてゐる。

兩者はそれぞれ石窟番號を附してゐるが、計算の起點を異にしシャヴンヌ氏は中央第二區より數へ、關野・常盤氏は東方第一區より計つてゐるため、またシャヴンヌ氏は關野・常盤氏の大佛三洞（卽ち第十九窟中・左・右洞の三窟）を各々十六號窟・十七號窟・十八號窟と讀み込んでゐるために、兩者の窟號が合致しない。猶また新進研究家の稱呼も一二あつて、その窟號は極めて混同され易い。今、兩者の稱呼と、更に石佛寺々僧の命名とを對照すれば左の如くである。

【關野・常盤氏】

東方第一區
- 第一窟　東塔洞
- 第二窟　西塔洞
- 第三窟　隋大佛洞
- 第四窟
- 第五窟　大佛洞
- 第六窟　大四面佛洞

中央第二區
- 第七窟　西來第一山洞
- 第八窟　佛籟洞
- 第九窟　釋迦洞
- 第十窟　持鉢佛洞
- 第十一窟　四面佛洞
- 第十二窟　椅像洞
- 第十三窟　彌勒洞
- 第十四窟　千佛柱洞
- 第十五窟　千佛洞
- 第十六窟　立佛洞
- 第十七窟　彌勒三尊洞
- 第十八窟　立三佛洞
- 第十九窟　中洞
- 第十九窟　左洞
- 第十九窟　右洞
- 第二十窟　大佛三洞
- 第二十一窟　大露佛

西方第三區
- A窟
- B窟
- C窟
- D窟
- E窟
- F窟
- G窟
- 第二十二窟　塔洞

【シャヴンヌ氏】

東方（第一）窟
- 一號窟　阿彌陀佛洞
- 二號窟　釋迦佛洞
- 三號窟　準提菩薩閣
- 四號窟　佛籟洞
- 五號窟　阿閦佛洞
- 六號窟　毘盧佛洞
- 七號窟　接引佛洞
- 八號窟　離垢地菩薩洞
- 九號窟　文殊菩薩洞
- 十號窟　接引佛洞
- 十一號窟　萬佛洞
- 十二號窟　普賢菩薩洞
- 十三號窟　接引佛洞
- 十四號窟　寶生佛洞
- 十五號窟　阿閦佛洞
- 十六號窟　阿閦佛洞
- 十七號窟　阿閦佛洞
- 十八號窟　白耶佛洞
- 十九號窟　二十號窟
- A窟
- B窟
- C窟
- D窟
- E窟
- F窟
- G窟
- H窟　西塔千佛洞

東方（第二）窟　石鼓洞

東方（第三）窟　寒泉洞

東方（第四）窟　靈巖寺洞

【寺稱】

＊シャヴンヌ氏は東方第一區の四窟を單に東方諸窟と呼び、その第三窟のみを東方大窟と呼んでゐる。

＊＊常盤博士は新著『支那文化史蹟』解說第一卷に於てシャヴンヌ氏の二十號窟をその第二十一窟と爲し、シャヴンヌ氏のA窟よりG窟に至る七窟をそれぞれA・B・C・D・E・F・G窟として採用した。從つて舊著の第二十一窟塔洞は新に第二十二窟塔洞となつてゐる。（支那文化史蹟解說第一卷・雲岡全景及石窟配置圖參照）

★　★

第二回配本
第九輯　河南
（昭和十四年六月上旬より配本）
龍門石窟・嵩山
圖版部　百二十葉　百七十圖內外
解說部　百三十頁　挿畫十數葉內外

龍門石窟

龍門石窟は雲岡石窟と共に支那に於ける最大石窟の雙璧をなすもので、世界の至寶と稱すべき遺蹟である。その佛龕・石佛の數は萬を以て數へることが出來るが、特に古陽洞・賓陽洞・蓮花洞の如きは無比の價値を有する。また俗に唐の大佛と稱せられる奉先寺廬舍那佛像は、刻造史上の一新起原を劃し、恐らく我が奈良大佛の範となりたるものたるべく、またこれが造營の任に當つて功ありし人が、淨土教の大成者、善導大師であつたことは我國との結緣まことに深い遺品である。雲岡の石窟は隋時代のものと見られる第三窟を除いて、他は全て北魏のものであるが、龍門石窟は同じく北魏太和年間より初まつて、次第に東魏・北齊・隋・唐に及んでゐる。從つてこれらの時代の造象樣式・藝術的手法の推移をそれぞれの石窟に於いて明瞭に比較研究出來る。また雲岡に於て今日にまで發見された造象銘文は僅かに四個にすぎないに反し、龍門には明瞭な造象銘が千個以上にも達し、これが彫刻形式の發達を研究する上の正確にして貴重な資料となつてゐる。またこれらの造象銘は書道の方面より、北銘の古風を傳へる文字として注目され、その拓本は書家の珍重するところである。龍門四品、十品、或は二十品と稱するは、造象銘の傑作を選んだものである。第二輯全百二十葉內外中、特に七十四葉百十圖を龍門石窟に當て、微に入り細に亙つてその全貌を明かにせんことを努めてゐる。

嵩山

嵩山は太室・少室の二山より成り、支那五嶽の隨一で、五嶽の中央にあるが故に中嶽と呼ばれる。歷代朝廷の崇敬甚だ篤く、この山を中心として其の附近に施設するところ多かつた。而もその位置が僻遠のため、戰亂の慘禍を蒙ること比較的少かつたから、極めて多數の遺蹟を今日殘してゐる。

少室山麓に北魏達磨の故地と傳へられる少林寺の巨刹があり、太室山麓に永泰・會善・法王・嵩嶽・碑樓の諸寺がある。いづれも北魏時代の創建に係る古刹である。また嵩高を祀れる中嶽廟はその起原恐らく漢代以前に遡るべく、古來嵩山信仰の中心である。嵩陽觀はもと北魏の嵩陽寺で、廢して觀となつたもの、宋代には儒學の府として嵩陽書院と呼ばれた。更にまた崇福宮址あり、開母廟址がある。これらは中外にその名高きもので其處に現存する遺品遺物の貴重なる史料として、また各時代を代表する傑作として擧ぐべきもの尠くない。その主要なるものを列記すれば左の如くである。

少林寺
- 鼓　樓（元）
- 初祖庵（宋）
- 皇唐嵩嶽少林寺碑（唐開元十六年）
- 息庵禪師行實之碑（元至元年）
- 石刻釋迦三尊像（東魏天平二年）
- 石刻釋迦佛像（北齊武平二年）
- 石刻釋迦三尊像（北齊天保八年）

永泰寺
- 大唐中岳永泰寺碑（唐天寶十一年）
- 萬佛殿塔塔
- 萬佛殿塔塔（唐天寶五年）

會善寺
- 淨藏禪師身塔（唐天寶五年）
- 戒壇記碑（唐貞元十一年）
- 中岳嵩陽寺碑（東魏天平二年）

法王寺
- 十五層塔（唐）

嵩嶽寺
- 十二角十五層塔（北魏）
- 唐嵩嶽寺大證禪師碑（唐大曆四年）

碑樓寺
- 劉碑（北齊天保八年）

中嶽廟
- 石人（漢）
- 鐵人（金）
- 北魏中嶽嵩高靈廟碑（北魏大安二年）
- 宋新修嵩嶽中天王廟碑（宋開寶六年）

嵩陽觀
- 大唐嵩陽觀聖德感陽碑（唐天寶三年）

崇福宮址
- 泛觴亭石畦（宋）

大室石闕（漢）

少室石闕（漢）

開母廟石闕（漢）

以上の如く漢以降六朝唐宋元時代の遺物がかくも多數に一處に保存せられることは、他の地方にその類を見ざるところである。第二輯はこれらの遺蹟・遺品中、能ふ限りの紙面を割いて之を圖版し解說して、その文化史的意義を剩すところなく闡明し、その偉觀を展開せしめるであらう。

支那佛教史學

既刊年四回發行
内容目次年額金三圓
定價一冊金八十錢

第一卷　第一號

末法思想と諸家の態度（上）　高雄　義堅
支那唯識學史上における楞伽師の地位　結城　令聞
唐の朔方管内教授大德辨才について　山崎　宏
三階教資料雜記　塚本　善隆
釋經史考　横超　慧日
梁高僧傳索引

第一卷　第二號

禪宗の法系問題と「四十二章經」　常盤　大定
雲岡における曇曜の五窟について　水野　清一
經典解釋の方法論の研究（上）　坂本　幸男
西藏民族の研究（上）　寺本　婉雅
般若部黨史　梶芳　光運
曇鸞大師管見　藤野　立然
續三階教雜記　塚本　善隆
梁高僧傳索引

第一卷　第三號

加賀大乘寺所藏の「六祖壇經」と「一夜碧巖」について　鈴木　大拙
老子化胡經の研究（上）　福井　康順
末法思想と諸家の態度（下）　高雄　義堅
西藏民族の研究（下）　寺本　婉雅

第二卷　第一號

梁　戸　攷　板野　長八
宿坊としての唐代寺院　小笠原宣秀
沙門法顯の歸還の航路について　野上　俊靜
老子化胡經の諸相　松本文三郎
五台山佛教の展望　坂本　幸男
山西省大同を中心とせる佛教史蹟　酒井　忠夫
梁高僧傳索引　俗人名篇　諏訪　義純
唐の排佛論者傅奕について　春日　禮智
遼代佛教に關する研究の發展　塚本　善隆
梁高僧傳索引　藤野　立然

第二卷　第二號

唐の朔方管内教授大德辨才について　山崎　宏
三階教資料雜記　塚本　善隆
梁高僧傳索引　横超　慧日

第二卷　第三號

梁　戸　攷（續）　那波　利貞
石山寺本梁高僧傳とその道安傳校異　岩井　諦亮
圭峯宗密の研究　古田　紹欽
東西二林寺の研究（二）　春日　禮智
梁高僧傳索引　俗人名篇

第二卷　第四號

聲論中吳集解について　小林太一郎
經典解釋の方法論研究（下）　大野　法道
道教史上より觀たる三張の性格　川上　天山
「于闐國縣記」漢譯攷　淺野　研眞
東西二林寺の研究（一）　塚本　善隆
北魏太武帝の廢佛毀釋　小林　照道
儒佛道三教交涉研究の展望
梁高僧傳索引　俗人名篇

第二卷　第一號

梁　戸　攷　那波　利貞
宿坊としての唐代寺院　道端　良秀
沙門法顯の歸還の航路について　足立　喜六
老子化胡經の諸相　福井　康順
五台山佛教の展望　井上以智爲
山西省大同を中心とせる佛教史蹟　結城　令聞
梁高僧傳索引　俗人名篇

第二卷　第二號

宋元時代的「磨喝樂」の一考察　傅　芸子
明初の寺院　龍池　清
梁　戸　攷（完）　那波　利貞
遼代燕京の佛教　野上　俊靜
支那佛教初傳に關する諸研究　春日　禮智
梁高僧傳索引　書名篇

第三卷　第一號

唐代における僧尼所隷の問題　山崎　宏
高麗藏の舊雕本と新雕本との考證に關する實證的研究　大屋　德城
唐代の泥波羅道　足立　喜六
新羅僧義湘傳考　八百谷孝保
支那禪宗史研究の展望　高雄　義堅
梁高僧傳索引　書名篇

發行所　法藏館
振替東京一四五七〇番
振替東京一四〇八番

支那文化史蹟

月報　第二號

昭和十四年七月一日印刷
昭和十四年七月五日發行
編輯印刷發行人　西村七兵衛
東京市神田區神保町一
法藏館
振替東京二五一四番
電話神田三四八二番

龍門・嵩山の巡禮

龍門石窟の拓

鄭州に於て、洛陽に邦人森長鶴鳴氏が根據を構へて居るといふ事を聞いたのは、予に取つて大切な事である。予はかねて龍門について一種の註文を抱いて居たが、邦人の居住者が有ると聞いては、兎も角註文に向つて一歩を進めて見たい。鞏縣も、嵩山も、後に廻して、洛陽に直行し、車站前の集雲棧に森長氏を訪ひ、早速意見を語つた。時に上海と漢口より二人の同胞も、同車で入洛し、同宿する事となつたから、洛陽は邦人で時ならぬ賑ひを呈した。予が森長氏に諮つたのは、(一)兵士や巡警なしに龍門にゆく方法なきか、(二)龍門に一泊する工夫なきかといふにあつた。そは敢て物數寄でない。危險區域を以て鳴り、特に對岸の香山寺には人の居住を許さぬまでに、土匪の縱横する龍門では、此岸の潛溪寺、奉先寺に屬する石窟を一覽するにさへ、日返りには困難である。之が爲に普通の人は單に潛溪寺に行つたばかりで、これで終了と聞かせられ、龍門觀覽も目出度く終了、これが有名な龍門か、何で有名なのであらうといふ感想を抱いて、引き返すのである。此岸の奉先寺すら見ぬのである。況や對岸の香山寺、石窟寺などに往く事は絶對に出來ぬ。更に況や龍門について特殊の註文を爲すなどは、癡人の夢に外ならぬのである。さて、予の特殊の註文といふのは、賓陽洞入口内面兩側の全拓と、老君洞内壁の全拓といふ、從來何人にも試みられざる企圖で、この註文を完成せんには十日位滯在せねばならぬ。完成は他日に讓り、その標本を得るだにも、少くも一泊せねばなぬ。一泊となれば、兵士や巡警が伴行しては、實行するを得ぬ。これ予が氏に對して、一應聞けば物數寄と聞ゆる相談を爲した所以である。

森長氏は某地方に進入して、非常な危險を冒した經驗を有する人である。脾肉の歎に堪へぬ折に、此相談を得たのであるから、後日に聞けば、これが非常に氣に入つたとの事で、一言の下に承諾の上、明旦、徒歩にて、洛陽の老拓翁を伴ひ、一泊の豫定にて、同行すべしといふ。予にはまた徒歩が非常に氣に入つた。北京出發以來、汽車と馬車と人車とのみに動搖せられて、甚だしく疲勞して居る際であり、天地共に開曠の平野の徒歩が願はしいのであつた。斯くて首尾能く徒歩によつて、龍門に達し、老拓翁に向つて、破天荒の註文を爲したが、翁が成否を疑ふので、先づ老君洞の一部を自ら拓して標本とし、斯く爲すべしと命じた。老拓翁は自分一存にては返事する事が出來ぬとて、その夜龍門に居る專門拓夫を集めて、小田原評定を開く事となつた。潛溪寺の住持が、折しも洛陽に在り、香山寺には人が居らぬので、少しく引返して、龍門街に一宿したのである。

× ×

龍門賓陽洞の全拓は、その一部分にせよ、未だ嘗て試みられざるものである。洛陽から伴つた老拓翁は、四十年間も、これを本業として居たが、彼等の拓は、文字のみであるから、造像と銘文とを併せて、之を爲す事は、まだ經驗せぬ所である。予は造像と相並べてこそ銘文の價値はあれ、之を離しては單に六朝の文字を見るのみ、研究の目的に適合せぬから、是非に併せて之を爲すべきを註文し、自ら標本を造つてまで見せた。彼等は出來るといふ確信を得たから、いよ／＼之を爲すべき心組となつたが、然し何程の紙數となるのやら、全く見當がつかぬので、從つて何程の拓賃となるものやら、五里霧中である。頻に小田原評定をやつて居たが、決着がつかぬので、予は價格は言ふに任せる、唯「墨色をよくせよ繼續の明了なる樣にせよ、龕中の佛像は別に拓して、之を空地に貼布せよ」といふ命のみに止めたが、然し無智に

して、單に金錢あるのみの彼等である果して我目的に適合する樣になし得るやら、到底安心して任せるを得ぬ。目を離さば、必ず手を拔く工夫を爲すに相違ないとは思つたが、さりとて約十日間こゝに滯在して、監督する譯に行かぬ。一切を老拓翁に委して、一泊にして去つた。

× ×

嵩山を遊歷して居る間に出來て來たが、實に大きいので、宿屋の中などでは之を開く譯に行かぬ。大體を檢査するに、繼續は不明了で、老君洞のは、合格でないのみならず、到る所手を拔いて居る。而して價格に至つては、約束以上を貪るが、この場合に至りて、言ふも無益である。東大寺の庭をかりて、一度之を擴げて、檢査を終へて後に受け取らうといふ議もあつたが、予には左樣な時間の餘裕がない。兎も角彼等が破天荒の註文に對して、相當の努力を爲したのであるし、またこれにても龍門の大觀が彷彿せらるゝから、やゝ滿足する事とした。十分の滿足を得んが爲には、更に殘されたる大部分に向つて、新に企圖せねばならぬが、時候寒氣に向ひ、今年は拓するを得ぬといふによつて、一先づ之を切り上ぐる事とした。

嵩山へ

嵩山の遊歷にも、予は兵巡を附せらるゝ事なしに、心靜かに調査の目的を達したいと願つたのであるが、龍門行に於て、予の目的に隨喜した森長氏は進んで嵩山にも同行する事となつたので、兵巡などに心を用ふる事なしに、横行濶步して、思ふ存分に調査が出來るといふ希望を以て出發した。嵩山の陰陽には澤山の故趾がある。第一に、達磨九年面壁の故趾と傳へらるゝ少林寺、これは少室山陰にあるが、これと横に相對して、太室山の西部に永泰寺は魏の會善寺といふのがある。永泰寺は孝明帝の妹が出家して開基したもので今猶尼寺として繼續して居る。會善寺は唐代に盛大な戒壇院を其側にひかへて居た。本邦の佛教學界には聞こえて居らぬが、支那では有名なものと見えて少林寺と同じくその住持は勅授であつたのである。

嵩陽は早く開けた土地である。予は斯る邊鄙の土地に、何故に文化の未だ開けざる時代に於て、居住者が多かつたかを、地圖の上にて見ては不明であつたが、實地を踏査して見ると、理由が判る。嵩山の陽面に當ること、て、頗る溫暖で、予の旅行は十一月の末であるけれども、歩くと汗が出、日光に射られて身體がだるい。休息するには樹蔭や塀影を選ばねばならぬ程である冬期の嚴寒でも、一錢銅貨位の厚さの氷しか無いといふ。嵩陽の最も佳い地勢を占めて居るのは、嵩嶽寺と法王寺とである。嵩嶽寺には六朝までも遡る恰好のよい大塔があり、法王寺にも、嵩陽に特殊の形式を爲せる大塔がある法王寺は佛教初渡の時、摩騰、竺法蘭の所住であつたと自稱して居る。そは勿論後世の附會に過ぎぬが、然し名刹であつた事は疑はれぬ。法王寺より東南に下れば嵩陽觀がある。これ宋初の四大書院の一つで、二程子に因緣を有する。その近くに崇福宮といふがあり開母廟の址がある。崇福宮には、思ひもよらず全眞教に關する二元碑があり開母廟址の前には、漢代の畫像を刻せる石闕がある。嵩陽には太室、少室、開母の三石闕があつて、いづれも割合によく保存せられて居るのは、珍らしいことである。

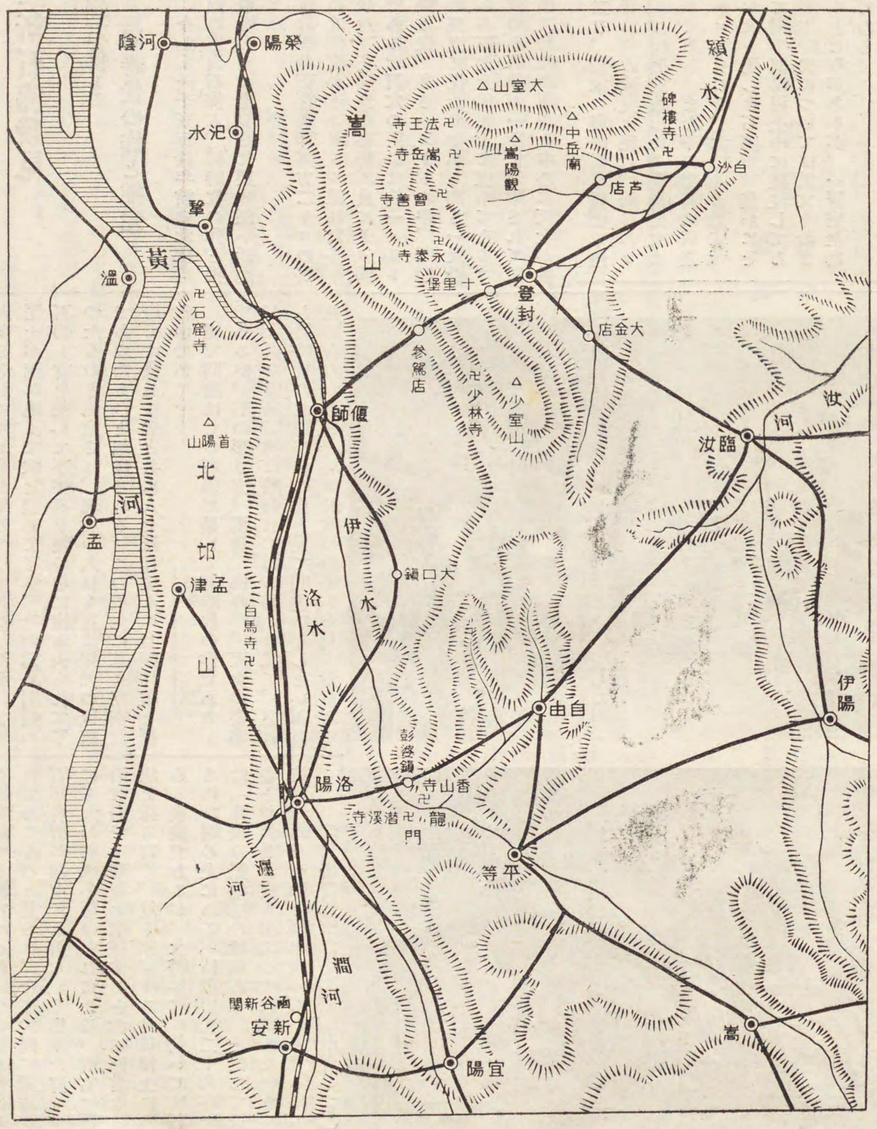
登封縣の東門を出で、少しく東南の方向を取つて進めば、遠からずして中岳廟に出る。これ北魏の寇謙之が得道せる故趾として、支那の教學界に注意せらるべきものである。寇謙之は北魏廢佛の原動力となつた人であるから間接に大同や龍門の石窟を成立せしむる因緣を爲したのである。折しも四十日間とか續く祭日に當つて居るので、廟內雜閙して、取調べの手を伸ばすを得ずして去つた。一見した所で、注目すべきものは、寇謙之の名ある碑、鐵人、北京東岳廟に見らるゝ如き幾多の司神などである。門外に休息して居たら、一老翁が側に來て、稷に柿を交へた團子を出し、試みに之を喰へというて止まぬ。而して獨言のやうに、好人は斯る食事に滿足し、不好人は山に入つて土匪の中に加はるなどいひて、此地の土匪の多きを暗示し、我等が日本人であるといふを聞いて、日本は遠い所であらう、話が不明了であるといつて居た。

それより東南四五十支里を距つて、洞頭といふ所に碑樓寺がある。劉碑の造れる巨碑を藏めて居る。此地土匪の襲擊が多いので、寺中に住む僧がなく僅に留守居を置いて居た。洞頭には巡士の數が僅に二十人しかないので、一旦土匪の襲來を知る時は、全村悉く逃れ去つて、土匪の去つた後に、また還つて來るのであるといふ。予等の宿せるは、土室であつたので、頗る予の趣味を滿足せしめ、劉碑もまた滯りなく一覽するを得たのみならず、數百年の塵を拂つてその大部を拓したのである

（大正十年十一月）

常盤大定著『續古賢の跡へ』より

河南洛陽附近略圖



下花園に新石佛發見

大同雲崗石佛と同時代の作と推定

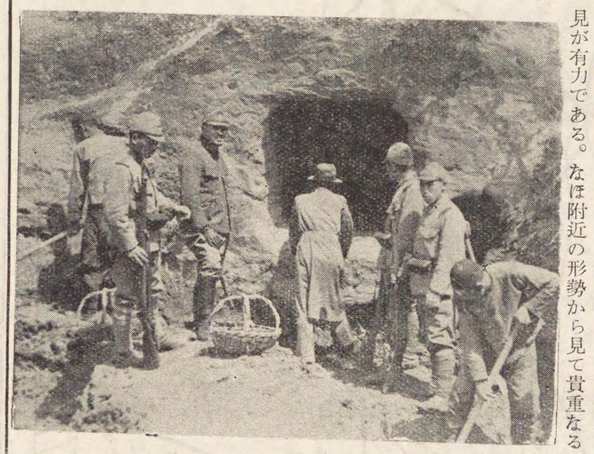
【張家口發同盟】今から一千五百餘年前の北魏時代の作とされる大同の雲崗石佛と、同時代の作と推定される小石佛が最近察南に發見され興味深い話題を投げてゐる。

この小石佛は京包沿線の下花園驛東方二キロの鶏鳴山南麓鐵道線路の北側僅か十メートル離れた崖下の小石窟の中に、最近下花園炭礦事務所員により偶然發見されたものである。洞穴の入口は約一メートル四方、廣さは十疊敷位、高さ一メートル半、問題の石佛はこの洞穴の正面に泥土の中から高さ一尺餘の首だけを出し首から下を全部泥土に埋めてゐる。

洞穴の壁には無數の小石佛が一面に浮彫されて居り、又天井には直徑二尺餘の蓮花を中心に天女が數人ゆるやかに舞ふ圖が彫りつけてある。氾濫により泥土が流れ込んで穴を埋めて了ひ、その爲め問題の石佛も首を殘して下半身を泥の中に埋め去られて了つたものと推定され、現在の入口も實は採光の天窓であつたものと想像される。この推定に基き察南政府では發見報告と共に人を派し盛んに發掘作業を續行中である。

處で問題はこの石佛が果して何時代の作であるかであるが、石の彫り方、模様、佛の形、天女の姿等が大同の雲崗石佛に酷似してゐる點より見て、之れと同時代の北魏時代の作と見て間違ひなしといふ意見が有力である。なほ附近の形勢から見て貴重なる石佛を藏する洞穴はこれ一つでなく他にも多數埋もれてゐるものと見られ、今迄大同に獨占されてゐた石佛名所が察南にも新らしく出來た譯で今後の發掘に多大の興味を懸けられてゐる。尚右に關し察南自治政府では發掘を繼續すると共に適當なる保存の方法を採る可く、近く來蒙する鳥居博士にも意見を求める模様であるが、大體年代に就いては石佛の發見された岡の上にある「清朝道光二十八年」の碑面には「北魏の照皇后の墳墓あり」と記して居り「石佛寺と神仙僑を後人相集つて修理した」ともあるので結局大同の石佛と同年代のものと見られる。

〔同盟東亞第二號十四年五月廿二日〕



去る五月二十二日、張家口發同盟電報は京包線下花園附近に新石窟の發見を報じ、同日のラデオ・ニュースもこれを放送した。電報全文はこゝに掲げる通りである。また下の寫眞は同盟通信員の撮影にかゝるもので、上段は發掘作業、下段は同石窟の本尊と覺しき石佛で、僅かにその頭部を露出して、下部は泥土中に埋沒してゐる。この石窟の製作時代については電文そのまゝを信用し得ざるところがあるが、一層完全な發掘を期待されてゐる。

第三回配本

第三輯　廣東・湖南

（昭利十四年七月下旬配本）

廣東　廣州・曹溪
湖南　雲門山・潮州山
南長沙嶽・潙山　等

圖版部　百二十葉　二百十圖內外
解說部　百三十頁　挿畫十葉內外

廣州

廣州城內の光孝寺はその緣起は遠く南北朝に遡る名刹で禪宗第六祖慧能大師の剃髮處であつて、菩提樹あり、髮塔あり、風幡堂がある。その東西の兩鐵塔は、南漢の佛教文化を表現する名塔である。六榕寺は蘇東坡の命名せる所で、梁代に創建され、宋代に再建された巨塔があり、また六祖大師の銅像を有してゐる。華林寺の五百羅漢中にマルコポーロの像と傳へらるゝ善注尊者を有する。又、文廟あり、五仙觀あり、懷聖寺がある。

曹溪

廣東省韶州なる曹溪南華寺は六祖慧能大師の故地にして、堂塔具足し、六祖大師の肉身像を有する外に、明代に再興の功績ありし憨山大師の肉身像を藏する。

雲門山

乳源縣に屬する僻遠の地にある雲門寺は禪宗五家の一たる雲門宗の開祖文偃禪師の肉身像あり。また禪師を記念すべき大寶元年碑・大寶七年碑の二碑を藏する。

潮州

潮州の開元寺は南支名刹の一にして、三石憧、宋鐘を有する。また城內及び韓山なる韓文公祠には蘇東坡の撰文に係る昌黎伯韓文公廟碑あり。白鸚鵡賦碑がある。

南嶽

湖南省南嶽は泰華恒嵩と並んで五岳の一にして嶽麓には南嶽廟がある。陳の慧思禪師の遺蹟、三生塔あり福嚴寺あり、上封寺あり。懷讓が馬祖に付法せる故地磨鏡臺あり、曹洞宗の祖師石頭の遺址南臺寺あり、後善導の稱ありし法照の故址祝聖寺あり。また嶽麓山には宋代の儒教大學と言ふべき嶽麓書院址あり、衡州なる石鼓書院と共に天下の四大書院と稱せられ儒教史上、重要なる位置をとる。

潙山

寧鄉縣の潙山は禪宗五家の一たる潙仰宗の開祖たる靈佑の故址にして、山下に同慶寺あり、佑祖塔唐碑あり。山中に密印寺あり、寺域に裴公庵あり。唐相裴休はこゝに住し、がゝに終る。山中の潙山にその墳墓がある。

岳州・君山・長沙

岳州府城の西門樓は宋の范文正公の筆に天下之を知らざるものなき岳陽樓である。君山には娥皇女英の恨みを千古に傳ふる墓祠あり。長沙は古來湖南學藝の淵叢地にして賈祖祠、曾國藩祠にその名高し。

後記

★豫告に第二回配本は第九輯とありました處、編輯上の都合によつて第二輯として發行致しました。また第二回配本には嵩山中嶽廟・嵩陽觀・崇福宮址・石闕等を包含する豫定でありましたが、內容が膨脹して收容し得ざるため、後輯に繰延べることになりました。內容については著者は出來得る限りの擴大と充實とを期して、新發見の資料、更に價値ある資料は努めて網羅すべく努められております。從つて收容項目は今後とも多少の移動ありますこと、玆にお斷り申し上げます。

★本書「支那文化史蹟」の公刊に寄せられた學界並びに讀書界の要求と聲援とは、發表旬日にして豫定部數を突破して、遂に品切となり、御申込を御斷りするの餘儀なきに到りました。御斷り申し上げました向には何とも申譯なき次第でありましたが、何分コロタイプ版のため、再び製版するには時日の餘裕なく御要求に應ずる事が出來ませんでした。厚くお詫び申し上げます。

★第三輯「廣東・湖南」は目下製版中でありますが、期せずして本夕（六月二十七日）の新聞は、わが汕頭攻略部隊は怒濤の如く、北上して潮州へあと一里の地點に進擊しつゝあることを報じております湖南は長沙暴戾なる支那軍の焦土戰術のため灰燼に歸したといひます。廣東・岳州は既にわが皇軍の威武下にその文化工作は着々と進行中であります。それにつけても一日も早く支那の重要地點がわが皇軍の手に確保されるのが待たれるのであります。

道端良秀著

最新刊

概說 支那佛教史

菊版クロース裝函入
二七〇頁、圖版四十四
定價金貳圓
送料金十四錢

目次

1、佛教傳來の徑路及びその年代　2、後漢三國西晋時代の佛教　3、東晋時代の佛教　4、東晋時代の佛教と社會　5、南北朝の佛教　6、南北朝の佛教思想と信仰　7、佛教々團の發展及びその弊害　8、南北朝の佛教文化　9、末法思想と石經事業　10、隋代の佛教　11、唐代における諸宗の發展　12、儒教道教と佛教の抗爭　13、唐朝における佛教對策　14、寺院經濟と僧官の制度　15、唐代佛教文化の諸相　16、五代の佛教　17、宋代の佛教思想　18、大藏經の出版事業と飜譯　19、宋代佛教々團の發展　20、宋儒と佛教及び道佛の關係　21、邪教の跋扈とその反亂　22、遼及び金の佛教　23、元代の佛教及道佛の爭　24、元代の佛教教團と社會　25、明代の佛教及儒道との交渉　26、明代の佛教々團と社會　27、清代の佛教。

附錄　支那佛教史參考文獻抄錄（日本教會史關係）

支那佛教史學

年四回發行
年額金參圓
一冊金八十錢
送料六錢

第三卷・第二號（七月十日發行）

北魏の佛教匪　塚本善隆
唯識教學に於ける佛地經の系統に就いて　西尾京雄
天台智者大師の實踐的性格に就いて　佐々木憲徳
南齊佛教と蕭子良　小笠原宣秀
隋唐に於ける長安の大總持寺に就いて　古田紹欽
成唯識論所弘の厚嚴楞伽二經の出據について　松浦秀光
金代佛教に關する研究に就いて　野上俊靜
道宣の支那戒律史に於ける地位　故甘蔗圓達
批評紹介・支那佛教史學關係論文要目・彙報

淨土學

年二回發行
年額金一圓五錢
一冊金八十錢
送料六錢

第十四輯（六月二十日發行）

南宋子元の白蓮宗と其餘黨の邪說　望月信亨
宋版臨終正念要決に就て　藤堂祐範
一遍上人繪傳の再攷　望月信成
感譽存貞に就ての一考察　鼠瑞澂
永明延壽の思想　池田英淳
後鳥羽上皇の御信仰　寶田正道
最近淨土教關係雜誌論文內容紹介　編輯部
附錄　金澤文庫藏隆寛撰　極樂淨土宗義（中卷）　谷村諄教校訂

東京市神田區神田鳥丸町一番地
東京都市神田區神田一番地
發行所　法藏館
振替東京一四五七〇番
振替大阪二一四〇番

支那文化史蹟

月報
第三號

昭和四十年八月廿五日印刷
昭和四十年八月廿五日發行
編輯兼發行人　西村七兵衛
東京市神田區神田鳥丸町一番地
法藏館
振替東京一四五二番
電話神田八二三四番

乳源・雲門山へ

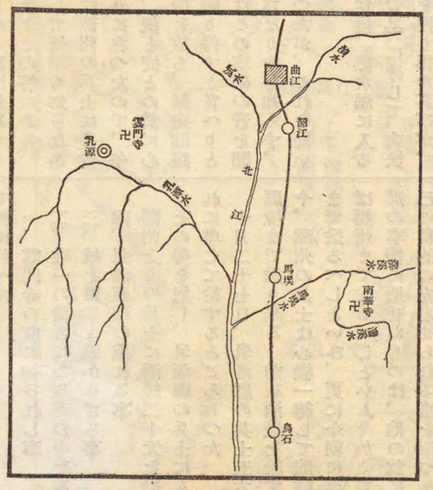
常盤大定「廣福巡禮記」より

昭和三年十二月二十五日、予等一行六人は二十五人の兵士に護衛せられ、八輛を連ねて韶州を發ち、乳源縣に向つた。北江を渡れば、坦々たる大道である。善後署が窮民を救はんが爲に、賞を懸けて早成を期しつゝあるものなりといふ。乳源縣は九十支里の距離にあり、一人として縣に至れるものがないので、勿論雲門寺を知悉するものゝ有るべくもない。大道の左右は墓地である。北邙ならずして西岡で、墓の形式の廣東式に一種の風がある。最も良きは石にて疊み中部は磚にてし、下部に袖がない。また前庭を造るものもあり、造らざるものもあり、又、中に文字を刻せる石を嵌するものもあり、嵌せざるものもあり、これを嵌するは新しい。

既にして左方に道を轉じて、小路を進み、龍歸墟なる輕に憩ひ、こゝにて晝食を採つた。町にては龍澄市と作してゐる。晝食はすべて粉（ファン）といふ。蓋し米そうめんである。代價、予等六人に二人の軍人を加へて五元である。以て北支に比して物價の不廉なるを推せしめる。乳源水を渡り、流に沿ひて上り、午後六時半に乳源縣に著した。思の外の小市で、而も半ば亂後兵燹の跡を示して廢墟の如き觀がある。この小市に予等一行を迎へたのであるから、その警駭、察するに足るものがある。知縣公署に至れば、總務科長劉冠五氏出でゝ應接せらる。予等初め城門に近き廟に東道せられたが、やがて公署を以て宿所と定め、公署に迎へて食事せしめらる。用意周到である。

公署の室中に『夢中得句詩無字、辭後揮毫筆有花』の聯が懸けられてある。文の國たる風情が斯かる中に掬し得られる。乳源縣城の周圍は巨樹多く、流に臨んで風水塔が立つてゐる。西方に聳ゆる山嶽は突兀峨々として山姿水勢、支那に稀なる風景で、他の地方と全くその風物を異にする。後に福建省に至れば、乳源縣の風物に類して居た。食事の用意に手間取るので、この間に熱水湖に浴すべしとて、城外に至る。璧を以て回らせる溫泉である。十四日の明月を仰ぎ、突兀たる山姿を觀つゝ溫泉に浴するの快は、言ふべくもない。浴し終りて還つて衙門に至れば、鼓聲輕々と響く。更鼓なりしといふ。更鼓を耳にして思は遠く天外に馳せる。食事を終へて談合の末に明朝八時に登山すべき約を結んだ。

十二月二十六日、朝食に手間取り、辛くも午前十時を以て、乳源縣の兵士五六人先道し、韶州の兵士中健足のもの十餘人同道して雲門山に向ふ。雲門曲、樂人村を歷て、東北に向ひて次第



廣東韶州附近略圖

に登り、丘上に至れば、雲門亭と題せる亭がある。こゝより平坦にして、既にして雲門寺に著した。雲門寺とは當初大覺寺或は光泰寺と稱せられたが今は雲門古寺と題してある。縣の寺院が悉く廢せられたる中に、唯この一寺のみが遺されたのであるといふ。而も寺領は悉く學校に寄附し、寺僧戰前には二十人許あつたが、今は妙珍なる若僧一人あるのみ。僅に乞士として糊口し、寺は近くまで賊の所住たりきといふ。支那の現狀、實に愍れむべく、文字に見る塗炭の苦しみとは、これである事を實見した。妙珍師は八年以前より住すといふ。その志、悲壯のものがあらう。

寺の規模は頗る小で特に見るべきものがないが、祖師殿内に開山文偃の肉身像を安ぜると、門の兩側亭内に文偃に關する大寶元年碑及び大寶七年碑のあるは多とすべきである。

大寶元年碑とは「雷岱撰、大漢韶州雲門山光泰禪院匡眞大師實性韶幷序」である。大寶七年碑とは「陳守中撰、大漢韶州雲門大覺禪寺大慈雲匡聖弘明大師碑銘」である。兩碑ともに「金石萃編」に錄せられてない。「廣東通志」「韶州府志」に七年碑を載せ、希覯本たる「南漢金石志」の中に共に掲載せられてあるが、元年碑は「乳源縣志」よりの轉載で、撰者は「諸書倶に未だ著錄せず」といふ。七年碑は拓本によつたのであるが「前人の著錄これに及ぶものなし」と言つてゐる。斯くて稀にその著錄もあるが、然しこれを實物に照すに、七年碑には流石に誤謬少いが、元年碑には澤山の誤謬がある。斯くの如き學界に未だ知らるゝ所少き二碑が、茲に今日嚴存してゐるのは珍とすべきである。文偃の傳は「宋高僧傳」に載つてゐない。「景德錄」の中に僅に見えて居るが、その傳と見るべきものがない。「佛祖通載」は間接に七年碑を知つたかと思はれるが然し實物に接しなかつた。

南漢の佛教は全く雲門文偃一人の力によつて盛況を呈したと言つても宜い程の關係があるにも係はらず、この二碑の知られなかつた事は、文偃傳を不明ならしめた所以である。斯くの如き唯一の資料である貴重なる二碑が、現に嚴存してゐて、今こゝにそれを探求し得たことは予にとつて重大な收獲であつた。大寶元年碑の碑趺龜首の下は掘られてゐる。賊が贓物を隱せる所なりといふ。外に明の成化二十一年の大鐘がある。

寺僧の募緣簿には縣東十三里雲門古寺奉勅光泰禪院とある。拓し、照し、一應の調査を爲した後、妙珍師に曹洞派なりや、臨濟派なりや、雲門派なりやを問へば、菩提派なりとの答である。

予は調査に沒頭して何事も知らなかつたが、後に聞けば韶州の兵士は晝食せずして、門の内外に在つたので、午後三時頃に至るや、飢と疲との爲に心平ならず、時に空砲を放ち、歸途龍歸墟に一泊せずんば歸り得ずと言へりとの事であつた。予はこの空砲の音を聞いたが、その何の爲なりやを知らず、多く念にかけなかつたが、これを聞いてすべてが分つた。

五時頃歸衙し、食後、熱水湖に入るに、宛も十五夜の明月天に沖して、爽快極りない。雲門山を搜り得た喜びが、この爽快あらしめるのである。

明早朝出發であるので、準備に忙はしい。この夜の宴に、予は四喜を述べて禮に代へた。

一、雲門寺の直に知られし事
二、唯一の遺されたるその寺なる事
三、城を離るゝ遠からざる事
四、祖像祖碑の遺れる事

韶州よりの兵士に酒錢二十元を給してその勞を慰し、乳源縣の兵士にもこれに準じて給するところあつた。

十月二十七日、乳源縣の兵士五六人縣境まで送り來る。前夜酒錢を給するや、韶州の兵士は心機一轉して龍歸墟まで送るべしといひ、更に今朝に至れば韶州まで送るべしといふ。かくて支那の事情に通ぜぬものは、他の爲に自己の目的の左右せられる事を氣づかぬのである。

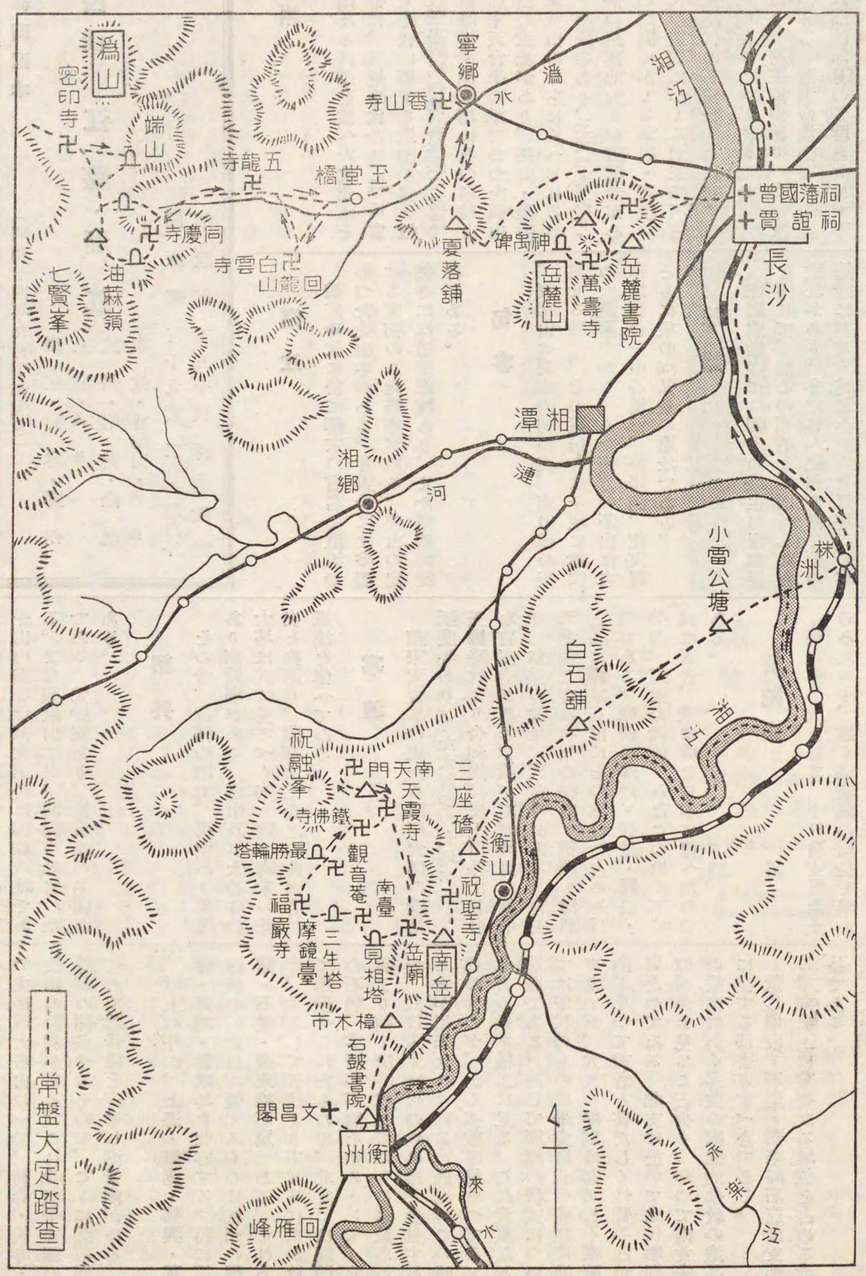
午前七時出發、多く下轎せずして午後五時に韶州に歸つた。

訂正

第二回配本・第二輯圖版部・圖版第九十九
嵩山少林寺　尊勝陀羅尼呪之帔　拓本
は陀羅尼も文字も裏返しになつてゐるべきであるところ、印刷上の手違ひのため反轉しております。よつて第三回配本中に、正しきもの一葉を添付いたしました。不正のものを破棄してお取換下さい。

第一回配本・第一輯圖版部・圖版第三十
雲岡　第八窟
とあるは誤りで
(1) **拱門左側〈部分〉溼婆天**
(2) **拱門右側〈部分〉毘紐天**
(1) **拱門右側〈部分〉毘紐天**
(2) **拱門左側〈部分〉溼婆天**
とあるべきです。
茲に謹んで訂正いたします。

長沙・衡州附近略圖



第四回配本　（昭和十四年九月下旬配本）

第四輯　江蘇・浙江

鎭江・句容・蘇州・上海・其他・杭州・紹興・餘姚・寧波・普陀山・其他

圖版部　百十九葉　二百六圖內外
解說部　百五十頁　挿畫數葉

杭州

風光明媚なる西湖を控へた杭州はその附近一帶に、吳越時代の遺蹟に富み、又宋元時代に屬する遺物の多い地である。吳越王錢氏の佛敎保護の跡は、六和塔・雷峰塔・保俶塔にその名殘りを示し、趙宋天台學の雄であつた孤山梵天・慈雲の遺址があり、徑山・靈隱淨慈は禪家五山のうちに數へられる名刹である。昭慶寺あり、三天竺寺あり、明代禪念佛の祖蓮池大師の雲棲寺がある。宋代の開鑿にかゝる烟霞・石屋の石窟は元代の造顯にかゝる飛來峰石窟と共に宋元時代の石窟藝術を代表するもので世に喧傳せられるものである。また文廟あり、岳王廟があり、吳越文穆神道碑がある。西湖の放鶴亭、先賢祠九曲橋は三潭印月の景勝と共に天下に名高い。

鎭江

趙宋時代に於て禪宗の有名な道場であつた金山寺がある。甘露寺には半壞せる宋初の八角鐵塔がある。焦山の定慧寺には道德經幢あり、また瘞鶴銘殘碑がある。

句容

寶華山は明末淸初の交、南山律の振興せる地で、その慧居寺は今現に律宗の大道場である。また南方の茅山は古來道敎の一中心地で、華陽洞、乾天觀ともに梁の陶弘景の遺址である。

蘇州

虎邱雲巖寺には劉宋の道生が涅槃經を講じて、無心の頑石を點頭せしめた遺址があり。また日本紀州の僧日順の鑄造にかゝる梵鐘がある。双塔寺の塔と北寺の塔は蘇州を飾る紀念物で、寒山寺は人口に普く膾炙するところ、天平山白雲寺は范文正公に因緣の址である。また靈巖山は吳王闔閭の離宮の址である。元妙觀あり、滄浪亭の名園がある。

紹興

その昔、會稽の地で、禹廟あり禹陵あり南鎭廟がある。塔山及び大善寺の大塔は共に見るべく宋六陵は南宋の悲史を物語り、蘭亭は王羲之の曲水宴の風流を傳へてゐる。

寧波

趙宋天台學の雄たる四明大師の遺址延慶寺あり。また天封寺の大塔がある。三國時代より舍利崇拜史上內外に著名な育王寺がある。我が道元禪師の就學せし如淨の故址、天童寺がある。育王天童の二寺は杭州の徑山・靈隱・淨慈と共に禪家五山にその地位を占める巨刹である。我朝の傳敎・智證・圓載・榮西・道元の諸師、みなこの地に來て或は天台、或は禪を日本に傳へたのである。

普陀山

觀音の淨土として、今日猶支那全土のみならず、遠く滿蒙藏の信徒を集める普陀山は上海の東南、舟山列島中にある。五台山・峨眉山・九華山と並んで支那四大名山の一で、前寺・後寺・法雨の巨刹がある。これ我が平安朝の慧蕚の開基せるもので、こゝに慧蕚が初めて觀音像を安ぜし潮音洞がある。

以上の外に、**上海・無錫・嘉興・嘉善・湖州・餘姚**等を收容する。特に第四輯中、注目に價するものは杭州の**烟霞・石屋・飛來峰石窟**である。これらは、主として五代より宋元時代にかけて造顯せられたもので、北支には龍門の石窟、雲岡の石窟を始めとして、北魏より隋・唐時代までのもの多數あるが、五代宋元時代の物は殆ど發見することが出來ない。而るに此處にこの時代のものが、かく多數に集まつてゐて北方の缺を補ふに足る。これ貴重なる遺蹟である。而して彫刻の樣式については宋代のものは畢竟唐式の繼續に過ぎないが、元代の彫刻は甚だしく喇嘛的となつて前者と甚だしく性質手法が異なつてゐる。北支に於いて元代彫刻の遺品を見ること少く、却つて南支宋の故地にかく多數の喇嘛的佛敎の遺品に接するは奇とすべきである。

蓋し烟霞・石屋・飛來峰石窟は支那の彫刻史上に重要なる地位を占める遺品である。

支那文化史蹟

月報

第四號

昭和十四年九月十三日印刷
昭和十四年十月五日發行
編輯兼印刷發行人　西村七兵衛
東京市神田區神田錦町一
法藏館
振替東京二五四一番
電話神田二三四八番

寶山石窟の發見

常盤大定著「續古賢の跡へ」より

山東濟南に於て、余は「魏の武定二年、道憑法師造」といふ文字の拓本を買つた。道憑とは北魏唯一の學者といふべき慧光僧統の十大弟子の一人である。元來支那の各地に現存する幾多重要な造像の中で、佛敎史上に名ある人の手に成つたものが極めて少い。如何なる大德が、その背後にあるすらも想像することが出來ぬ。明白なのは唯僅かに山西雲岡の石窟が臺曜の發願に成つた事のみである。今や道憑造といふ文字を見た。寺の事であるか、像のことであるか、一切判らぬ。又果して現存して居るやら否やも分らぬ。けれどもこれを實地について踏査して見ねば結局は何の結果もあらはれぬ。吾人と全く別世界に住んで居る支那人のいふ事など耳を傾けて居ては、遂に何の要領をも得ずに終る。この拓は河南省彰德府の西七十支里の寶山のものであるといふ事だけが分つたから、何としてなりともこゝを踏査して見たいといふ念願が拓本を手にした時からの懸案であつた。

昭和十年十一月二十七日の夜、東の方歸德府から鄭州に還り、翌二十八日の未明を以つて直に北向して彰德府に向ふ事とした。主として寶山を探らんが爲である。三迫富松君が府の南方に當る湯陰にその根據を構へて居るので『そこに行かば寶山の位置が分り、山寺の現存するやも分るだらう。幸にその附近に用事もあるから、これを兼ねて一人の支那人を同行せしめても可い』といふ。好意誠に謝すべしである。湯陰に下車して二三の支那人に尋ぬれば寶山はこゝから西北七十支里の距離に在り、彰德府からなれば西南五十餘支里に過ぎぬといふ。彰德府から行くのが當然である。湯陰には扁鵲の墓もあり、岳飛の墓もあり、張騫の廟もあるけれど、余の立場からは直接の關係がないので、一人の支那人の同行を得、更に乘車して彰德府に著し、こゝに一泊した。翌二十九日、滿目の氷霜裡に轎を驅つて、西の方五十支里の水冶鎭に至りて寶山寺の位置をたしかめ、こゝから徒歩せねばならぬので、先づ休憩すれば、この地に來れる日本人は初めてなりとて人皆珍らしがる。休憩した家の隣家は土匪の爲に破壞せられたとて住む事の出來ない樣になつて居る。その時兵士がドサクサに乘じて、自身また火事泥をやつたといふ。こゝから徒歩して西南の寶山に向つて通んだ。言はれた里數よりは遠い。二十五支里は十分にある。湯陰から來た支那人も初めての事とて道を知らぬので、聞きながら往く程に、いよ〳〵山にかゝつてから、方向を誤りて徑なき所に踏み込んだりしたが、暮色暗澹たる頃に辛くも寺に著いた。薄暮にすかして見れば、げにや唐以前の形式の四角墓塔などあつて、古物の保存せられて居ることが知られる。遙かに來た甲斐を喜ばずに居られぬ。

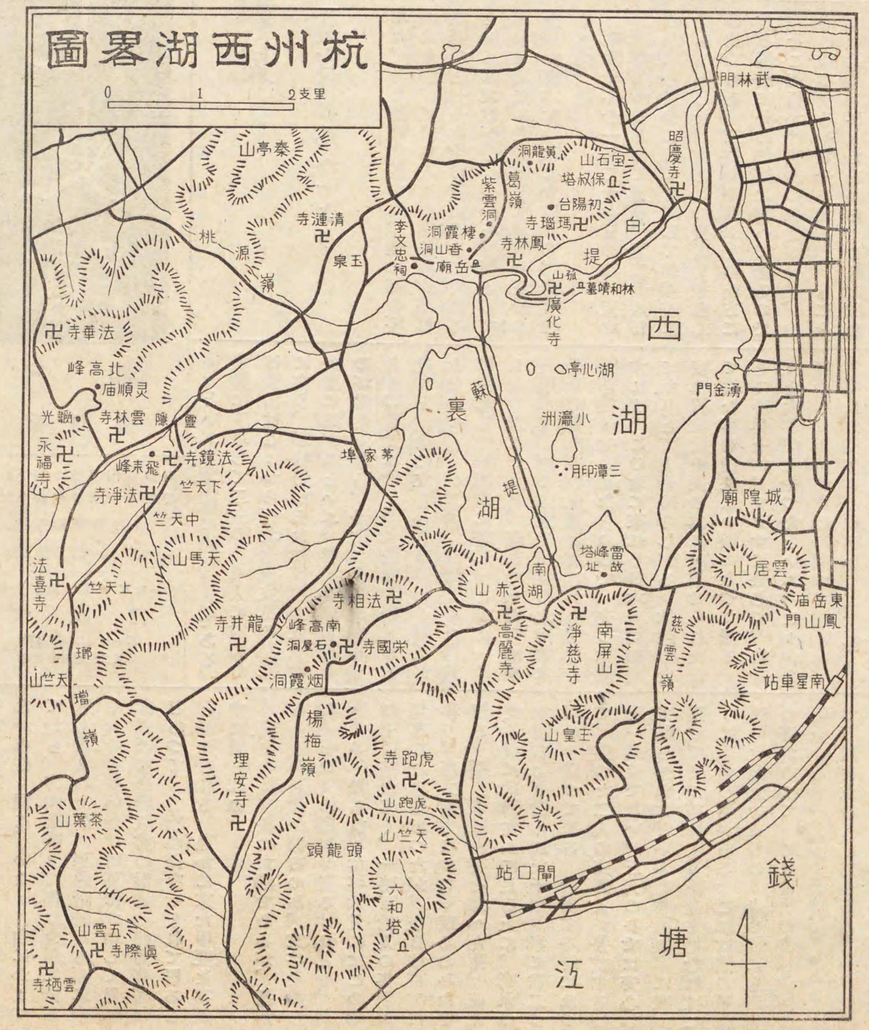
寶山寺は存外の大廟であるが、折から一人の若僧が居るのみ、文字を識らぬ。十餘人の農民が居るけれども、勿論文字を識らぬ。本年六月にはこの地の土匪甚だ多く、一時百餘人の集團が食事した事もあつたが、今日は東方に移り、西方南方に少しく殘るのみなど語る。粟の中に白菜を加へた粥、飢ゑたる折には猶食ふに足る上に、亳州の本間君より送られた干鰯が幸に猶二つばかり殘つて居る。就寢する時になつて、伴つた二人の支那人が警戒すると一通りでない。三人のみでは安心して眠られぬなどいふ。勿論無事に夜が明けて先づ前峰より調査を始むればこゝに四角の塔がある。これは隋の靈裕法師を記念せるもの。寺の後にも四角の塔があつて、これは唐の玄林法師の記念せるもの、中に法師の像もある。さて石窟を求むれば二つある。一は前峰の東方にあつて、小さいが中に三體の

坐佛を安ずる。窟門に大留聖窟と刻してある。これがすなはち道憑法師の造なのである。他の一つは寺續きの西方にあり、窟内外の刻文に大住聖窟とある。これが隋の靈裕の發願にかゝるものであつた。また兩窟を中心として百を以て數ふべき灰身塔がある。いづれも貴重なる史料たるは云ふまでもない。今回の寶山調査は一面からいへば盲目的であつたが、豫想だにせぬ收獲を得たのを喜ばずにいられなかつた。

斯くて宋代以後世上から消え失せたこれ等二石窟が千年餘を經て再び世に現はる事となつたのは、正に靈裕の念願の一端が達せられたのである。房山の石經といひ寶山の石經といひ、共に北周廢佛を逆緣として出來たものであるが、二つながら今日に殘つて居る所を見れば、隋代高僧の努力が千歲後に酬ひられたといはねばならぬ。

歸つて後に屢〻「何故にこれまで行く人がなかつたのか」と尋ねられたが、起原の古い寺のあるといふ事も知らず、況んや遺物のあるといふ事も知らぬのに何人が斯かる邊地にまで入り込む樣な物數奇をやらう。彰德府すら從來邦人の足跡を印する事が少いだらうと思ふ。況んや寶山の如き何の用事もなき地方に於てをやである。

★　★



寶山石窟

寶山は彰德の西南約五十支里、安陽縣にある。此處に北齊の道憑の遺刻にかゝる大留窟があり、またその弟子隋の靈裕の開顯になる大住窟がある。大住窟は三尊・兩脇侍の九尊を刻出し、壁間に「大集經」月藏分、「法華」「勝鬘」「華嚴」「佛名」等の諸經の文を內外壁間に選刻してゐる。これ北周廢佛事件に刺戟せられた靈裕が、痛憤の情を託すると共に、留住正法の信念を披歷したる、實に血涙溢るゝ護法精神の結晶である。規模小なりといへども佛教史上極めて重要の意義を有する。

響堂山石窟

南響堂山は河北省磁縣にあり、北響堂山は河南省武安縣にある。共に北齊の佛教文化を代表する造象がある。特に北響堂山石窟の「維摩」「勝鬘」「彌勒」の壁刻經は石刻一代經の嚆矢であつて、房山雲居寺の一切經石刻に先んずること約四十年（北齊の天統四年）である。之を企てたのは當時の大官唐邕でその堂々たる願文は第二窟外壁に些の磨滅なく、殆んど當初のまゝに嚴存する。願文に云ふ、

法寶は是れ歸依する所、謂へらく緇細は壞るゝあり、簡策は久しからず金牒は求め難く、皮紙は滅し易し、是に於て、七處之印を發し、七寶之函を開き、蓮華之書を訪ひ、銀鈎之迹を命して、一音の說く所、盡く名山に勒せん……

とあるは刻經の一大壯圖を明瞭に物語るものである。

寶山石窟は常盤傳士の第二回踏査（大正十年）に、また響堂山石窟は第三回踏査（大正十一年）に發見せられ、初めて學界に紹介せられたるものである。

第五回配本
第五輯　河南・河北
（昭和十四年十月下旬配本）
嵩陽・鞏縣・偃師
洛陽・開封・歸德
寶山・北響堂山 其他
南響堂山・其他
圖版部　百二十五葉　二百二圖內外
解說部　百五十頁　挿畫數葉

鞏縣

縣治西北三支里に西窟寺あり。砂岩石の斷崖を開鑿して石窟を造る。北魏東魏、北齊より唐初にかけて開顯せられたるもの、大小五窟あり。雲岡・龍門の石窟が當時の王室の靈廟なりしが如く、この石窟もまた然かなりしを察せしめる。また西南約二十支里、今八陵と稱するところに北宋の陵あり。陵制は唐の制を繼ぎ多少之を改竄せしものので、而も彼に比すれば規模稍小であるが明清陵制の先驅をなすものである。

歸德

孔夫子が弟子に禮を大樹の下に習はしめし址といふ文雅臺がある。神禹碑がある。また唐顏眞卿筆八關齋報德記碑がある。鹿邑の昇仙臺及び太淸宮は老子の遺址と傳へるものである。

開封

開封は卽ち宋の汴京の地である。大相國寺あり、國相寺あり、祐國寺等がある。國相寺の繁塔、祐國寺の鐵塔は共に名高い。汴京宮殿址に廟あり、今は龍亭といふ。我が善慧大師成尋の終焉の地がある。

洛陽　其他

洛陽は長安と共に支那第一の舊都であるが古代の遺物少い。その白馬寺は後漢明帝の朝、佛教の發源地であるが今は後世の再興に係る十三層の大塔存するのみ。府內の千祥庵存古閣には北魏より唐代の遺物を蒐集保存してある偃師には明倫堂文廟あり、宋昇仙太子碑がある。これは唐の則天武后の御撰御書に係るもの、技工極めて卓越する汜水縣には唐の等慈寺碑の巨碑がある。鄭州には開元寺の大塼塔がある。

嵩陽

第二輯に收容する豫定であつた、嵩陽觀・中嶽廟・崇福宮址・太室少室開母廟三石闕をこゝに紹介する。

嵩高を祀れる中嶽廟は、漢代以前に起原を有するもので、古來嵩山信仰の中心となつてゐる。鐵人あり、石人あり北魏中嶽嵩高靈廟碑あり、宋新修嵩嶽中天王廟碑がある。嵩陽觀はもと北魏の嵩陽寺で、廢して觀となれるもの、宋代には、儒學の府として嵩陽書院と呼ばれた。大唐嵩陽觀聖德感應碑があり、漢柏がある。崇福宮址には宋代の泛觴亭石畦を存する。太室・少室・開母廟の三石闕は漢代の遺品で、支那に於ける石闕最古の遺物であつて、山東武氏祠石闕に先だつこと約三十年、一地方にかく無事に遺存せられるは極めて奇である。

支那文化史蹟

月報
第五號
昭和十四年十一月十日印刷
昭和十四年十一月十五日發行
編輯兼發行人　西村七兵衛
東京市神田區神保町一
法藏館
振替東京二五四一番
電話神田三四二八番

老子の故址を求めて

常盤大定著「續古賢の跡へ」より

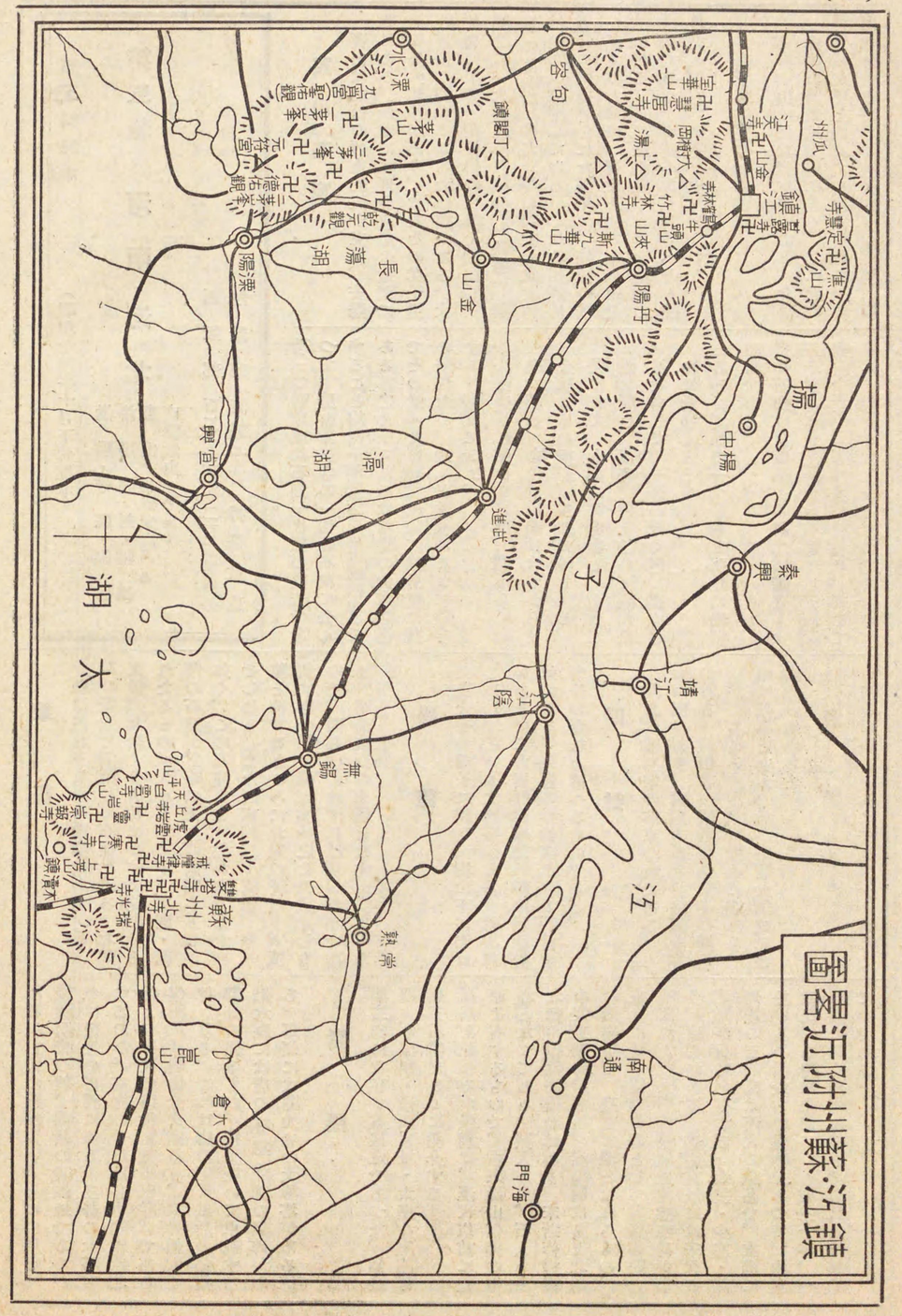
一

老子が宗教の尊體として祭られたのは文獻の上では後漢の末からである。後漢の末であるとすれば、新來の佛教の刺戟に負うたに相違ない。爾後道教なるものは佛教と相伴つて發達し、魏の寇謙之や、周の張賓や、唐の司馬承禎やなどによつて次第に發達したのである。斯くて佛教と道教とは互に深い關係を有する所からして、予は後漢時代より祭られた老子の故址を尋ねたいと豫ねて願うて居た。この故址は亳州とあるので、曲阜に行けば孔廟がむしろ曲阜を造つて居ると見らるべきに比較して、四百餘州に君臨した唐の祖先として、特に中唐の玄宗皇帝の崇拜一方ならざるものがあり、且つ民間信仰の一の大中心であるから、必ず堂々たるものがあるのであらうと思ひ込んだのである。亳州にさへ往けば直に判明するものと思ひ、他の地を綿密に取調ぶるに反して、却つてこの地の取調べを注意外に置いて居た。

大正十年十一月十九日。支那人朱を伴ひ、何とかならぬ事もあるまいと決心して洛陽を出發した。鄭州から歸德府までの汽車には同行者が一人あつたけれど、これは汽車だけの事である。下車して後の百三十五支里は、朱と二人にて馬車を驅つた。曇つて薄寒く頭が壓せらるゝ樣である。中途にわびしき假寢を結び、翌日午前三時より出發し午後三時頃に亳州に著いた。幸にもこゝに一人の日本人が居るのでその同行を要し、折しも降り出した細雨を冒して、早速衙門に至つて尋ねて見たが皆目判らぬ。予が後漢以來の老子廟を尋ねて得ず、轉じて故老なきかを尋ね次で縣志の有無を問へるに對して、曰く『城中東門內に道德中宮といふがあつて、その中に老子を祭るといふを聞く他は知らぬ』。曰く『衙門內に古の事を知る故老がない』。曰く『縣志は必要ある際に他より借りたが、いつの間にか途中に紛失して今は無い』。

以上は筆談によつてゞある。道德中宮は近代の粗建たるは一見明瞭なるもので、こゝに立寄る必要もないが、道士ならば或は知るだらうと思ふので、これに立ち寄つて尋ねて見たが、矢張知らぬ。道士に尋ねても判らぬなら、この上は致し方がないといふので、雨の中を歸宿してさて〳〵予は進退に苦しんだ。この時ほどに旅愁を覺えた事はない。土匪や馬賊や食物や困苦は、これを拂ふに足るけれど、遙々百三十五支里も來て、皆目判らぬといふに至つては到底浮ばれぬ。小學校の先生を尋ねようなどゝ思つたが、老子の故址が鹿邑ともあるに考へて、最後に鹿邑縣に馬車を驅る事に決心した。亳州は安徽省、鹿邑縣は河南省で、鹿邑縣は亳州より西方六十五支里にあるから、歸德府から總計二百支里となる。二百支里の深入りをして、果して尋ねる故址が得らるゝや否やを知らぬのであるが、この際空しく引き返すを得ぬからいづれにせよ徹底せねばならぬと決心したのである。

翌日もまた曇つて寒い天候に、心の中には無限の旅愁と、覺束ない寂寥とを懷きつゝ、茫々として新開地らしい而も土匪の出沒ありといふ地帶に進入して、滯りなく鹿邑縣城に著し、東門を入れば直に右手に當つて湖水中の一廟を見た。その狀態が一見して普通のものでない。或はこれが何等か老子に關係があるに相違ないといふ念が、卽座に我が胸に浮んだので、直に馬車を下つて外門に至れば、上に「衆妙之門」と題し、下の左右には「孔子問禮處」「宋陳希夷先生故址」と題して居る。尋ぬるものに相當するといふ見當がついたので、折しも暮靄遠くより至れる中を、廟內に入つて隈なく尋ね回れば、背後碑亭中に收められた碑の中にこれは老子昇仙臺といふ廟で、老子の生地


圖要近附州蘇・江揚
揚州
江都
高郵
寶應
淮陰
鹽城
蘇州
太湖
吳江
嘉興
杭州
湖州
長興
宜興
溧陽
丹陽
鎮江
常州
無錫
蘇州
崑山
太倉
南通
海門
如皇
泰興
靖江
揚子江
高郵湖
寶應湖
洪澤湖
長蕩湖
淮陰
鹽城
阜寧
興化
泰縣
如皇
通州
海門
崇明島
太湖
蘇州
無錫
常州
鎮江
揚州
泰興
靖江
南通
太倉
崑山
嘉興
湖州
杭州
吳江
宜興
溧陽
丹陽
鎮江
常州

たる鹿邑に於てその故址といふべきはこの昇仙臺と、城東十里の太清宮とのみであるといふ事を記したものがある。これでいよ／＼尋ぬるもの〻一部である事を確めて、予は頗る滿足し初めて愁眉を開いたのである。城東十里の太清宮こそは、正しく後漢以來の老廟であるに相違ない。これは先刻その前を通つて、下車して一見しようかとまで目を惹かしめたもので、大きい事はないが、あたりの風物が何となしに予をひきつけたのであつた。

老子昇仙臺を尋ねあて〻、急ぎ廟を一巡して寫眞を三つ撮る間に、日がいよ／＼暮れることになつたので、こゝに一夜を過す事に話がとゝのつた。夜珍らしがる村人との間に種々の話をした。その中に、相當の身分ありさうな容貌の立派な壯年が居て、予に向ひて『日本人』と書いた紙を示して尋ねるので、『然り』と答へて、而して後『日本は那邊にあるかを知り居るか』と問ひ返した。彼は『北方』と答へたので『北方には蒙古と、滿洲と、俄羅西とがあるでないか』といつたらち、『左樣々々』と言つたが、遂に日本の那邊にあるかを言ふを得なかつた。到る所、物識りと云ふべき人の日本に對する知識は斯くの如きものである。

二

翌日早朝馬車を驅り、引き返して太清宮に向つた。至つて小さい宮が一つあるのみ、道士が字を識らぬので一向に要領を得ぬが、廟前に老子の故址なるを記せる金碑があり、古來の太上老君贊を併せ刻した明碑があり、兩面に道德經を刻した碑と鐵柱とがあり、又少しく西に離れて元の張眞人道行碑がある。これよりも尙多數の碑があつたに相違ないが、今は失はれたのである。後に歸德府に還つて、偶然にも鹿邑縣出身の軍人安濤氏から、唐大宗の碑が人家中にある。然し字が磨滅して僅に四字しか見えぬといふ事を聞いた。これが後漢以來の老子廟である事は、今は一點の疑ひを容るべきでない。天候頗る寒くもあるし、また前途を急ぐので、一明碑を拓したのみで去るのは殘念であつた。

時に後宮があり、そこに唐碑があるといふ事を敎へた人があるので、急いで後宮なるものに至れば、先づ唐碑といはる〻のが目に立つ程の大なるものである。宋の眞宗の先天太后贊を刻したのであるから、實は唐碑でなくて宋碑である。これを照相して居たら、老道士出で來つて我等を迎へ、頗る喜んで宮內の明碑に案內してこれをも撮れといふ。不用といへば甚だ失望の顏色をしたので、先天太后の像を照相した。先天太后とは老子の母なのである。老道士大いに滿足して居る狀態がいぢらしい。この人は字を識つてゐた。その心を打ち明けての喜びが大に我意を得たので、仁丹二包を寄贈したら、忽ち口を閉ぢて仕舞つたので、變と思つたら老眼に浮べる涙を指で拂つて居た。何といふしほらしい事であらう。『再見々々』と言ひ殘して匆々に踵を回せば何とやら言ひながら門外まで送り出で老足到底追付けぬので、門外の高所に立ち、又手してとれを上下し、オー／＼といふ樣な大聲を放つて居た。予等の前途を祝福したのであらう。

斯くの如くにして老子の故址を尋ぬる猪突的の遠征が首尾よく成功した。若し前に『鹿邑縣志』を取調べて居たら、尙一層能く材料を得たであらうと思はる〻が、然し以上の外に碑がないから、これで滿足せねばならぬ。太清宮より間道を通れば、鹿邑・歸德直行の道路に出られるといふ事を聞いて來たので、その方向に進んだら、村人が親切にもこの道路は出水の爲に通過するを得ずと敎へて呉れた。いやでも應でも再び亳州に引返して、來路を二百支里返らねばならぬのである。後に縣志を調べて見たら、安濤の敎へた唐太宗碑といふものは現今は無いらしい。金代以上には夥多の古碑があつたけれど、その後悉く失はれたとあるから太清宮を取りまく古碑の遺物は、以上の外にはあるまいと思ふ。中に一大宋碑のあるのは、結構の事である。

三

亳州から歸德府まで急いで還つたら罷工の爲に汽車は三日前から運轉せず、いつ開通するやら前途不明であるといふ。宿主を呼んで莊子廟を尋ねた。分らぬ。開元寺並に靈臺寺を尋ねた。また頗る不明瞭である。埒が明かぬので讀書人に聞けと命じたら、立派な筆蹟で『老子を祀るを聞く。莊子を招くは何に囚るか』といふ逆襲を持つて來た。得たりかしこしと、『昨天鹿邑縣を過ぎて孔子廟に詣し、先月曲阜を過ぎて老子廟に詣した。この地は莊子の故地、必ずその廟あるべし請ふ我意を察せよ』と書いて、その人に見せしめた。筆蹟の人が直ちに來てくれた。そは鹿邑縣生れの陸軍中校衞安濤といふ中年豐頰の人で、早速訪問してくれたのである。氏は博識達筆の人である。筆談によつて暇を惜んで問答した。最初には兩方共に遠慮して居たので、氏は『莊子廟を知らぬ。府志を見るが捷徑』と普通の事を言ふ。『願はくはとれを借覽したい』といつたら、『讀書の人は誰も所有して居る』と答へ、

第六回配本
第六輯　浙江・福建
（昭和十四年十二月下旬配本）
天台山・台州 其他
福州・雪峰・鼓山
黃檗山 其他
圖版部　百二十葉　百七十五圖內外
解說部　百五十頁　挿畫數葉內外

天台山

陳隋の間、智山大師によつて開創せられた天台山は早くより我國人の耳に熟するところで、平安朝の初め我が傳敎大師とゝに遊んでより、爾後渡唐の高僧一たび此に學ばざるはない。

國淸寺・眞覺寺・高明寺・上方廣寺中方廣寺・萬年寺の大伽藍あり、天台大師の眞身塔を初めとして、上に華頂峰頭の大師降魔塔あり、また其名內外に高き石橋がある。國淸寺は寒山拾得の傳說を以て名がある。

福州

福州の白塔は雪峰義存の外護者たりし閩越王王審知の創建せるもの、また石塔寺の石塔には閩越王家最後の王曦の開顯せる當時の石佛數十軀を藏し、實に閩越文化を目前に彷彿せしむ。西禪寺は長慶慧稜禪師を開山とする巨刹である。また開元寺・東禪寺は共に宋代に於て、所謂福州本大藏經を雕印せる、文化史上重要なる名刹の遺址である。

雪峰・鼓山

閩侯縣に屬する僻遠に位置する雪峰の崇聖寺は雪峰義存禪師の道場にして枯木庵に大師の眞身像を藏し、鼓山の湧泉寺は義存の法嗣神晏が、王審知の外護により開基せるもの。堂々たる大伽藍にして、詣者常に踵を接す。これ近世明末の元賢・淸初の道霈の住持せる遺址にして、之が爲に三大藏の外に幾多の佛籍を藏するは支那の現在に於て異數とする。

黃檗山

黃檗山は福淸縣にあり。萬福寺は唐代に創建せられ、明末の隱元禪師によつて再興せられたるものにして、その松隱堂に、禪師の齒髮塔を有する。

★　☆　★

さて『歸德府には文雅臺がある。顏筆の八關齋碑がある。伐壇坑がある。また衙門には神禹の碑がある。蝌蚪文字である』などと敎へてくれた。予に取つて實に幸ひである。然らば汽車の開通するまでこゝに滯在して、とれ等の故址を探らうといふ事にした。氏は次第に心を許したものと見え『何に由つてこの地が莊周の故地なるを知るか』と質問して來たので『莊周は宋の蒙縣の人、古の蒙縣は今の歸德府なり』といへば、『この地この人傳を失す。府志を見るより外に致方がない』といふ。翌日府志を見ると城南二十丈里の小蒙城は莊周の故地とあるので土民に尋ねたが、今は無いといふ。莊子の故地は曹州にもありといふ說もある。いづれにせよ、附近に莊子廟はないのである。

斯くて問答も一段落すんだので、予は城を見がてらに出かけ、先づ衙門の神禹碑を訪ねた。元代に衡山の古碑を寫した複製である。次で南門外に至つて八關齋碑を探つた。これは古の開元寺址の碑亭の中に鄭重に保存せられてゐる。これで碑が知られると同時に開元寺の運命をも知ることが出來た。碑は八角の八石幢で、實に見事なものである。顏眞卿の如き武將に八關齋會報德記碑のあるのが珍らしいから、とれを拓して終日を送り、日暮れて後城門の通過が出來ぬので、小舟に棹さしめて、北門外の寓に還つた。

★　★

後日、予は上海に於て亳州在住の唯一の日本人本間氏より次のことを知り得た。

予の老子廟を訪うて去れる後、十日許にして、士匪の集團鹿邑縣を襲ひ、一千の官兵悉く敗亡し、旅團長が亳州に遁れ來た。段々たる砲聲三十里外に聞え、亳州城は堅く關して開くを許さぬ。鹿邑縣內の支那人百人許、佛人二名、賊に拉し去られた。中に百萬長者あり、その家族三人を拉し去り、一人三萬五千圓を以て贖はしめた。賊車は機關銃を有し官兵これに抗するを得なかつた。

鹿邑縣民は、ローギンヤ（老君爺？）を以て生きた神なりとし、太淸宮には生きた神あるを以て、災禍にかゝる事なしとの信仰を懷いて居る。長髮賊の時、宮前の鐵柱自ら動きて賊軍を追へりとの俗信もあり、縣民は宮內に遁れ入らば危險なしとの迷信より、家財を負うて宮內に入るもの少くなかつた。これ等は悉く賊の爲に掠奪せられた。拉し去られた百人もこの中のものである。あまり老君爺をたのみ過ぎた事がこの不幸を招いた所以である。云々。

支那文化史蹟

月報
第六號

昭和四十年十月二十七日印刷
昭和四十年十二月二十日發行
編輯印刷發行人　西村七兵衛

東京市神田區神田錦町一丁目
法藏館
振替東京二五四一番
電話神田三四八二番

雪峰へ

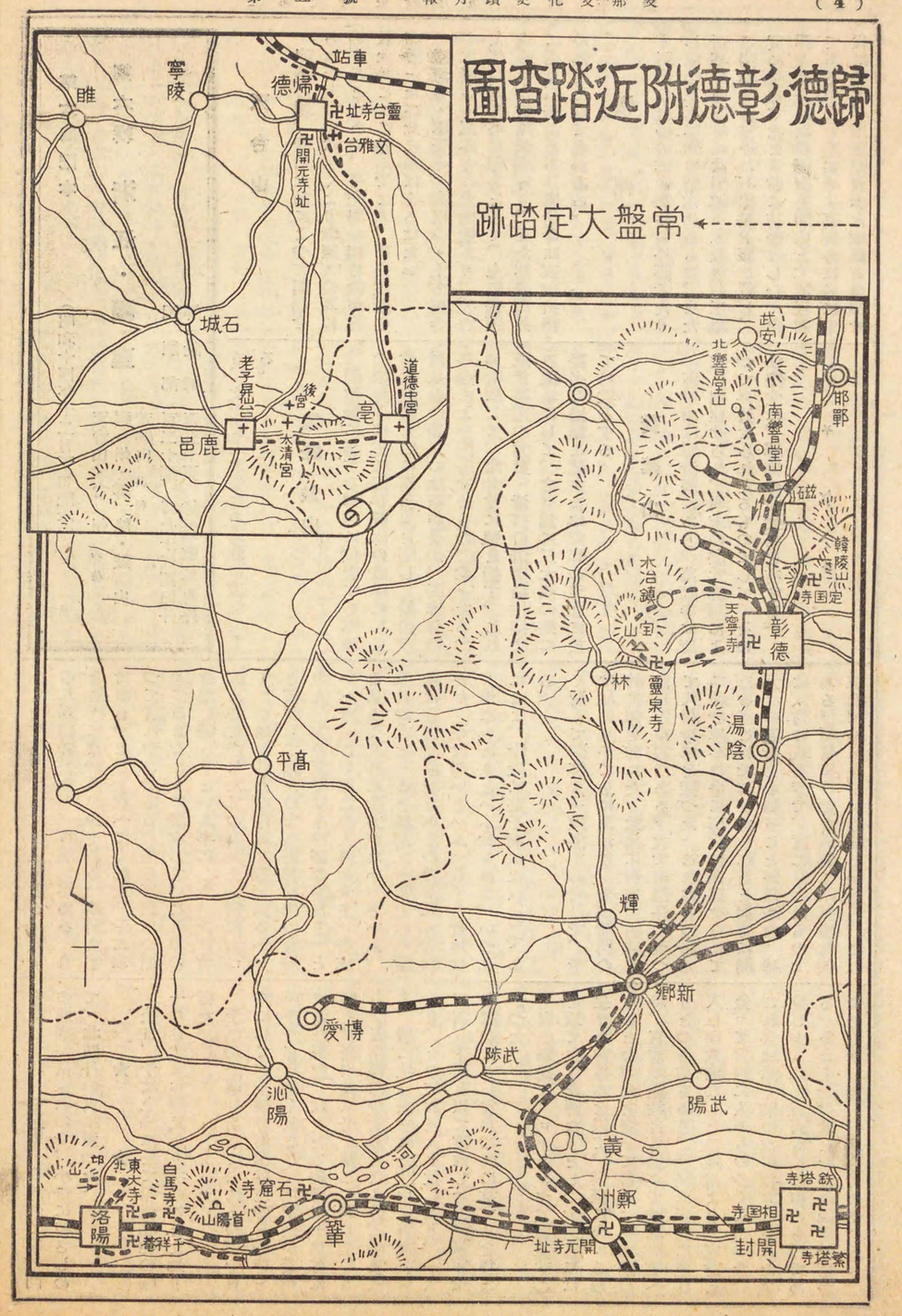
常盤大定『廣福巡禮記』より

昭和四年一月十一日、鼓山より歸館しての即夜、十一時半、モーター・ボートに搭乘して、閩江を遡り、雪峰行の途に就く。郭輝氏東道の任に當る。遡ること里許にして、前進するを得ずとて、碇泊す。直に歸福すべしの異論ありと雖も、遂に去從を船頭に一任する事とし、舟中に少時の睡眠を取る。

一月十二日、拂曉より船を進む。往々にして淺水沙磧の個所に接し、暗夜遡江し難かりしを會得す。既にして大寨近しと聞きて、一行の面に喜色浮ぶ。こゝより上陸すれば、大穆溪口よりするも、十支里近しと聞き來りしが、地方の人に問へば、却つて嶮路にして、且つ遠しといふ。急がば廻れの俗諺は、こゝにも亦眞理なり。乃ち更に遡りて溪口に至る。時に午前九時半なり。携帶品を擔ふべき苦力なし。十支里を步して、大穆溪村に至り、擔夫三人を賃す。三夫が即日歸溪せんが爲に、步力甚だ速なるは、此行に取りて却つて幸なり。村に韓公祠あり。これより登路となる。泗洲文佛を安ぜる休憩亭あり。義聖眞吾廟あり、玄天上帝廟あり。玄天廟は、太平莊にあり。こゝより右折して雪峰の途に入る。玄天上帝像の後方に佛像あり。上帝も佛像も、共に明代の作ならん。觀るべきものあり。こゝに至る前、大阮莊に風水橋あり。岸高くして、溪流を俯瞰し、岩石と激流と相待つて美觀を呈し、其景色我が木曾山道に類し、一步一步景趣を異にして、雪峰に進む。大穆溪村より雪峰崇聖寺まで、六十支里といふも、猶これよりも遠きが如し。その中間に太平莊あり。更に太平莊と崇聖寺との中間に藍田莊あり。藍田莊より崇聖寺に至る距離、十支里なり。雪峰は現時危險地帶にあり、爲に一行の精神緊張し、加ふるに步一步幽勝の境地に踏み入り、嶺を越え谿を度り、脚力盡きんとして、山更に幽なるの感あり。日將に暮んとする比、辛くも一同疲勞の體を寺門に休するを得て、興趣極りなし。大穆溪村に於て、今日午後二時、住持圓瑛和尚は、達本老師と共に下山すべしと聞き、頗る失望せしが、中途に遭遇せざりしを以て、或は猶山に在るべしと豫期せしに違はず、圓瑛・達本の兩和尚、共に猶山に在り。望外の喜なり。圓瑛和尚大に喜びて出で迎へ、新聞紙上にて雪峰來訪の意あるを知り、心に期する所ありしに、思ひの外に早き來訪かなとて、歡待已まず。

時に福建省陸軍教導團第一營第九連小校連長王孫瑛氏、約百五十名の兵を統率して、寺域中の留公菴にあり、寺門保護の任に當る。王氏部下の將校、やがて來つて護照を見て、一行の護衛を保證す。圓瑛和尚に導かれて客室に入れば、接待禮を盡し、一行の一人一人に茶を捧げ、蓋を取りて中を改め、更に之を覆ひて、點頭しつゝ各自の前に置く。斯る禮を盡されたるは、始めての經驗なれば、如何に之に應ずべきかを知らず。幸に郭氏の在るあり、大なる失態なきを得たり。茶の後に點心あり。然る後に食事に入る。素より蔬菜素食なりと雖も、その獻立、山門中の善美を盡せるものなり。一行の滿足歡喜、此上なし。

圓瑛和尚の雪峰晋山は、僅に十九日以前の十二月二十六日なり、その語る所を聞くに、和尚は、從來寧波の接待寺にあつて、七塔寺を督せり。苦辛萬端、雪峰を再興せる達本老師は、有力なるものにこれを授受せんとて、その後を嗣ぎて晋山せんを勸むる事數回、和尚は每に之を謝しつゝありしが、既にして達本老師は重患に罹れるが爲に、義として之を諾せるに、不思議に老師は恢復せりと雖も、今更之を辭すべくも無く、遂に晋山せるなりといふ。また雪峰の現狀を聞くに、もと此邊一帶方二十支里は寺に屬せしが、住持その人を得ず、廢殘を極めつゝある間に、



寺産の大部分は附近農民の所有に歸し、老師の之を再興するや、之を回收せんとするを以て、農民の間に之を苦しむものあり。之に因りて、寺に對する惡戯常に絶えず、老師の如きは、二十餘回の災難を蒙り、今日猶惡戯の跡を絶たず、教導團兵の滯在は、一は土匪の襲來に備ふるも、一は村民の惡戯に對するものなりといふ。一行、兩師の護法に熱心なるを聞きて、感深し。

一月十三日、午前四時離寺し、大殿内の大衆の看經に詣す。列するもの二十三人。和尚は緋衣を著せり。夜明けて、四方を望めば、彼此高低の丘上に悉く一人の兵士の立つを見る。その警戒の狀、以て之を推するを得べし。夜全く明くるや、達本和尚下山すべしといふ。乃ち面謁す。八十二歳の童顔の老僧なり。今日こゝに在りしは、寺田のことにつきて交渉時を費し、一日を延引せるなりといふ。一行が、圓瑛和尚のみならず、達本老和尚にまで、鼓山に於てせずして、こゝに邂逅するを得たるは、田の緣なり。予は之に因りて、田はこれ我が爲の福田なりといへば、老和尚の面に微笑浮ぶ。大衆送りて天王殿下に至る。圓瑛和尚と大衆と、地上に坐して兩手を地に垂れ、恭敬禮拜すれば、達本老和尚また輿を下つて、地上に坐し、同じく兩手を地に垂れて、恭敬禮拜す。その嚴肅なる禮讓、如何にも宗門師弟の訣別たるに相應し、斯る禮讓に初めて接せる一行は、暗涙に咽ぶばかりの感激に滿ち、大衆と共に送つて門外に至る。圓瑛和尚も共に下山すべかりしなれども、特に一日を延引し、一行の爲に心ゆくまで寺内を東道する事とせりといふ。

朝食後、圓瑛和尚、兵士を隨伴しつゝ、先づ寺域を回覽し、而して後背後の丘上の義存墓塔より、海會塔に及び留公菴前を過ぎ、鐵塔の名を以て呼ばるゝ陶塔より、門前の兩樓の間を過ぎ、藍公池の名を有する放生池を指點しつゝ、田間を過ぎて南方一支里の枯木菴に至り、枯木龕中の義存肉身像に謁し、こゝにて點心の饗あり。歸つて鼓山に登り、遠く象嶺・獅子嶺を指點し、近く鐘山を指示し、以て東道を終ふ。鐵塔は、榕樹によつて圍繞せられて、僅に一部分を遺すのみ、其形亡靈の蕭然たるに彷彿たり。午後三時に至り、一行少閑を得て、小春の如き太陽に暖を取りつゝ、飽くまで深山梵刹の清寂を掬す。情景共に全く俗塵を超絶す。

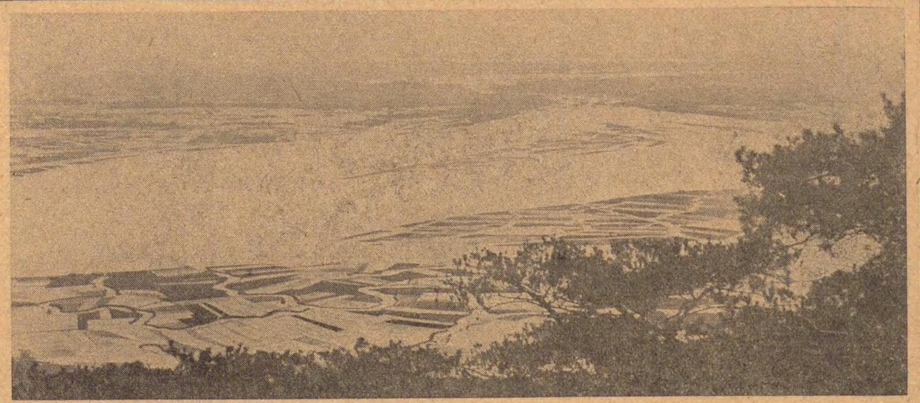
この日、近山に火事あり、夜に至りてまた火事あり、村民の惡戯にして、寺林に損害を與へ、而もその枯木を得んが爲なりとぞ。寺中の人心恟々たり。此間にありては、荒廢を極めたる雪峰古刹を再興して、この人烟遠き深山に、現在の如き大規模の伽藍あらしめ、益々寺門を恢張せんとする兩和尚の意氣や、雄壯にして、また悲壯を兼ぬるものといふべし。此日午後小閑を得たり。予は愚拙を顧みず、左の聯を和尚に呈す。

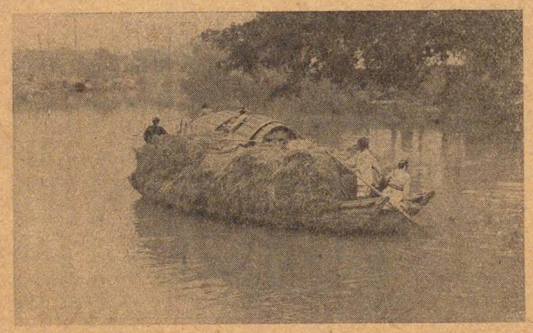
既見三毬隨物拋　何無雙樞與年新

和尚は自著「起信論講義」または「普門品講義」を一行の各自に寄贈し、且つ自詠の詩を揮毫して寄贈せらる。予に寄せられたるものは、左の七絶なり。

雪峰高倚白雲中　石棧盤旋九曲通
疊々煙蘿行欲盡　蒼山湧出法王宮

一月十四日、圓瑛和尚は、下山すべし。一行に對し、早朝出發せずんば、即日福州に達し難からんとて、切に注意する所ありしを以て、一行は前夜例より早く寢ね、今朝未明に離寺して、下山の準備を爲す。圓瑛和尚・郭輝氏は、轎にて下るべく、一行は二人の擔夫を伴ひ、徒歩にて下る事とす。斯る山路は、徒歩にして、休憩時を少くするを、最も快速に進み得る必須の方法とす。中途太平莊に於て晝食するを、一般の習慣とするものゝ如し。玆に至りて、晝食するや否やの問題あり。時に猶九時半なるを以て、一路下るべしと爲し、其後休憩を爲す事なくして、一擧して大穆溪口を距る遠からざる亭に至り、記念の撮影を爲し、下りて大穆溪に至る。正に午後一時なり。少憩晝食して、午後三時溪口に達す。郭氏轎を捨てゝ徒歩、走りて追ひ至り、以て能く同船するを得たり。乘船に際して、一同滿足の意に滿ちつゝ、船を中心として記念の撮影を爲す。舟夫また大に喜び、勇んで舟を操り、午後七時福州に着す。福州長橋上下に碇泊する大小の船筏は、全く水色を見ざるまでの輻輳にして、之を橋上より眺望する時は、天下の奇觀なれども、自ら乘船してこゝに着し、上陸せんとする時の煩勞言語に絶す。一艘一艘づゝを、振り分け、漕ぎ分けて、一寸一尺づゝ岸に近づき、然る後に辛くも着岸す。福州に着してより、上陸まで一時間を費せり。以て輻輳せる船筏の如何に多きかを推知すべし。斯くて衆の懸念せる雪峰行は、比較的の短時日に於て、能ひ得べき好結果を以て終了せり。此行の所得甚多し。其大なるは千百年前の雪峰義存の眞身に直接せる事なり、其小なるは轎によるよりも、徒歩の方却つて快速にして、而も機會を促ふるに最も便利なるを體驗せしめたる事なり。是に至つて、遊歴は正に蔗境に入れり。

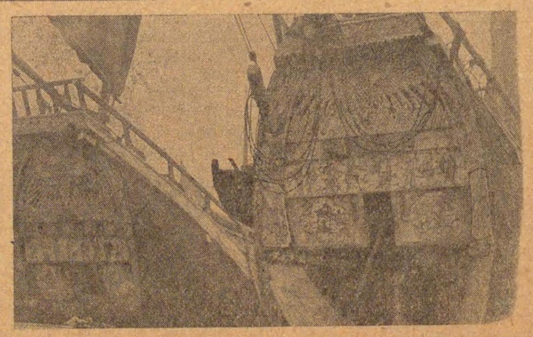




閩江（ミンキヤン）

閩江又の名は建江、源を福建西仙霽嶺の山中に發して東南流すること三百五十浬民船の通航區域は實に四府一州三十縣にわたり、二十七邑を連ねて居る。福建省城の福州は江口を距る三十四哩の上流左岸にある。外洋汽船は下流の馬尾に碇泊し、馬尾—福州間は小蒸汽船と帆船とによるが、諸處に淺瀨があつて、稍大形の蒸汽船は滿潮時を利用する。洪山橋を經て水口に至るまではなほ小蒸汽船を通ずるが、水口から延平まで約一三〇粁は河幅狹く水流急で、岩石多く帆船によらなければならない。延平より上流の舟運は民船による東北、中央、西南の三路がある。(1)洋口、邵武を經て光澤に至る一八五粁(2)建寧を經て浦城に至る二五九粁松溪まで一八五粁。崇安まで二二二粁。(3)永安を經て寧化に至る四四四粁。之である。昔、南蠻鴃舌の地と呼ばれた福建の陸路は極めて狹峻であるから、その交通は專ら閩江の舟運にまつところ甚だ大きい。實に福建を生かし、之を育てるものは閩江である。

閩江に浮ぶ民船の形式は種々雜多である。帆船にも風篷といふ布製の帆をもつものがあり、また竹製の帆を有するものもある。櫂にも槳（チョン）といふ長いものもあり、扒と呼ぶ團扇の如きものもある。また家族を常住せしめてゐる船仔（スンキヤン）があり、專ら雜貨を積む猫雀船と呼ぶものもある。その水上生活者は廣東の珠江上に住むものと同一といはれる蜑族（タン）で地方色豐かに閩江を彩つてゐる。



【上圖は福州附近の閩江で遙かに天涯にその本流を望む。中二圖は閩江をゆく民船である。櫂をおす女は長い三本の笄を挿す蜑族の女である。下圖は閩江下流に浮ぶ戎克の船尾で、眼もあざやかな極彩色を以て花鳥人物が畫かれてゐる。】

第七回配本
第七輯　山東
（昭和十五年一月下旬配本）
歷城・長清
青州・淄川
圖版部　百十五葉　二百圖内外
解說部　百四十頁　挿畫數葉

山東省に於ける石窟

支那に於ける南北朝及び隋唐の彫刻は最も多く雲岡及び龍門の石窟に遺存せられてゐることは云ふまでもない。併し山東省の各地に散在する佛龕、石窟には、前二者に比較的少い隋時代のものを多く保存してゐることは藝術史上、注目に價する。蓋し南北朝の文化は一面、隋に於て圓熟の域に達すると同時に、一面には別に新興の樣式蔚然として起り、以て初唐に於ける雄麗豐美な藝術を大成した。卽ち隋は南北朝を承けて唐に傳へ、其の間に藝術の一轉機を劃したもので、當代の藝術の研究の必要なる點がこゝにある。

然るに雲岡・龍門の彫刻は北朝と唐とに豐富であるが、此の重要なる過渡期たる隋代のものは極めて寥々である。幸にも山東の各地の石窟・佛龕に此の期の作品を多く保有してゐるから、それらは藝術史料の缺漏を補ふに足るものがある。

山東省に於ける是等の彫刻の所在は左の如き各所にわたつてゐる。

一、歷城　黃石崖……北魏
二、同　千佛山……隋（後世改修）
三、同　開元寺……隋・宋
四、同　佛峪……隋（後世改修）
五、同　龍洞……隋・元
六、同　玉函山……隋（後世改修）
七、同　神通寺……唐
八、同　九塔寺……唐
九、同　大佛寺……北齊
十、長清　靈巖寺……隋唐
十一、青州　雲門山……隋
十二、同　駝山……隋

黃石崖には規模は小であるが北魏時代の石窟及び摩崖刻像がある。千佛山開元寺・佛峪・龍洞・玉函山には後世の改修のため甚だしく當初の面目を失してゐるけれども隋代の刻像がある。神通寺、靈巖寺は共に山東佛敎の開祖東晉僧朗の遺址で、神通寺には唐代の千佛崖があり、靈巖寺には、唐代或は隋代と推定さるゝ證明龕がある。また此處には宋代の辟支塔がある。九塔寺には他に比類を見ざる形式の九塔の外に規模大ならざも唐代の石佛があり、大佛寺には北齊時代のものとせらるゝ石窟がある。

駝山及び雲門山の石窟は山東に於ける隋代刻像多き中に最も注目すべき遺品を有し、蓋し隋代藝術の精華とも云ふべき作品を含んでゐる。極めて短命であつた隋朝の當時の王城に遠きこの地に斯る優品を見るは隋代の佛敎文化の及べる範圍と深度とを語るものである。また雲門山には道敎全眞敎の祖師馬丹陽の刻像があり、陳希夷の臥像がある。

關野博士は山東省に於ける南北朝及び隋唐の彫刻につきて云ふ。「吾人洛陽の龍門、大同の雲岡及び山東省に遺存せる南北朝隋唐の作品を通觀するに、既に南北朝時代に於て稍系統を異にせる二流派の存在せるあり。其の一は所謂北魏式の中堅となれる者にて、朝鮮を經て我に入り、鳥佛師派の飛鳥時代の樣式を成せし者なり。其の二は當時僅かに其の蹤跡を見るに過ぎざりしも隋に至りて益々發展し、唐に入りて充分圓熟し、我が國に傳來して奈良時代の樣式の根本となりし者なり。吾人山東省に於ける隋時の彫刻を見るに、第一派は南北朝より隋に入りて完美の發達を遂げ、駝山第四第五の佛龕內の佛菩薩となり、崇高の風格洗鍊の技巧初唐盛時の者と雖も及び易からざる趣あり。第二派亦隋に入りて益々其の特質を發揮し、漸く圓熟の境に入らんとす。而も猶全く第一派の影響を免るゝこと能はず、且つ唐作に比すれば生硬の傾向なきにあらず。雲門山第二龕兩狹侍像、玉函山佛殿後方懸崖第五龕三尊佛及び龍洞第一洞佛菩薩の像等之が消息を語る者なり。而るに第一派は隋に於て充分圓熟の域に達したれども茲に終焉を告げ、第二派は愈發展して唐に入り、茲に始めて完美なる唐式を大成せしが如し。神通寺千佛崖の武德顯慶年間の佛像が殆んど南北朝式の痕迹を有せず、全然所謂唐式より成れるが如き以て之を徵すべし」と。

第七輯は是等の石窟の外に、青州の金石保存所・法慶寺・玄帝觀・文昌宮淄川の普照寺・龍興寺等を收容する。金石保存所には北魏造像・金趺石・元銅鐘あり、玄帝觀には唐鐘、文昌宮に北齊碑がある。普照寺には千餘年を經て初めて世に公にせられた六朝石佛がある。

支那文化史蹟
月報
第七號
昭和十五年二月十日印刷
昭和十五年二月十二日發行
編輯印刷發行人　西村七兵衛
東京市神田區神保町一
法藏館
振替東京一四五二番
電話神田三四一八番

石壁山へ

常盤大定『古賢の跡へ』より

石壁山は我が曇鸞大師の退隱修道せられし聖地である。當時は玄中寺と呼ばれたが、元の時代に律を改めて禪としその名をも永寧寺と改めた。曇鸞大師は北魏晩年の人であるが、下りて唐代の道綽禪師は大師の碑文を見て入信し時代を隔てゝ大師の弟子となり、此寺にも住したのである。我が親鸞聖人の鸞は、實に曇鸞の鸞を承けたもの、又壯年の時の名であつた綽空の綽は、乃ち道綽の綽であつた。それ程に親鸞聖人は曇鸞、道綽の二祖に私淑せられた。この永寧寺は二祖所住の聖地なのである。我が巡禮行の目的の大部がこゝにあるのは、この理由によるのである。

さて石壁山に行くにほ京漢鐵道の石家莊にて正太鐵道に乘換へて西行すること一五一哩强にて太原府に達する。こゝから轎車に乘り換へて西南に向ひ晉祠まで五十清里、晉祠より西南の清源縣まで三十清里、清源縣より更に西南の交城縣まで四十清里、交城縣より徒步にて西行十清里、右折して兩山脈の溪間を遡ること十清里、すなはち通計百四十清里にして石壁山に達するのである。この長々しい田舍の凸凹せる縣道又は里道を百四十支里も行つて全く徒勞に歸しては殘念である。然し巡禮行の大目的の一であるから、之を放擲するに忍びぬ。

晉祠で聞いた。あるにはあるといふ。當にはならぬ。進んで又清源縣で聞いた。交城縣生れの宿主は、縣の西北僅に五清里にしてあり、自分も行つたことがある。頗る繁昌して居るといふ。少し疑問があるけれども、大に意を强くした。

交城縣に着するや、念の爲に知縣に行つて、知事袁鴻吉といふ人に遇つて來意を述べて尋ねた。知事が古老に尋ねてくれたら、喜ぶべし『通志』にある通り、矢張り西北二十清里の外にあつて、俗稱石壁寺（シヂヤーヌ）といひ、五支里のものは街道のどこからも見える掛山天寧寺であつたのである。

さてあるにはあつても、行く道が分らぬ。東道者の心配を賴んで、知事の好意によつて、一巡警に荷物を馬に負はしめて、東道してくれる事となつた。寺に食物あるべきかを尋ねたら、「善く分らぬけれども、人が居るから、善惡を選ばぬならあるべし」といふ。善惡美醜を問ふの餘地がない。飢渴が凌げて參拜の目的が達し得られゝば、此上の事はない。

時に午後二時過であつた。知事は「山路甚だ難澁であるから、明朝にしたらば」と、好意の忠言を與へて呉れたが、一時の猶餘が出來ぬ。宿するならば聖地でせねばならぬといふので、筆を以て「我健足は三點半にして能く到り得べし」と記した。

前途が急がれる。巡警の準備が出來たので分れて出掛けやうとしたら、悠然たる知事は、どこまでも送つて來て容易に立ち去らず、七八町外の圃中に予等を誘ひ出した。何事かと思つたら綿を栽培して居る試驗場を見てくれといふ。知事は、圃中に立つて撮影してもらひたいのである。何かとして時を費し、快く分袂して、巡警に東道せられて石壁山に向つた。

西行十清里、この邊の村落は到る所頗る立派である。就中、堂々たる寺觀が、一村落中に二三個は必ず聳ゆる。のみならず、普通の家でも、大きいものになると、或は外面に向へる壁間に又は門より行き當りの壁間に小龕を構へて、道像を安置して、香華を手向くる。まだ到る所の白堊に遠慮會釋もなく、墨痕淋漓と、亡國の民云々とか、在國未亡之前云々とかの文句が書れて

居るので、例の排日の時の名殘であるかなどゝ想像しつゝ、十清里の安定村に着いた。そこの露天學校に充てられた龍王廟及び國民學校の壁上に書かれた長々しい掲示を見ると、必ずしも排日の爲ではなかつた。

安定村に到れば巡警はこの先の途を知らぬので、更に村人を傭ひ來つて東道せしめやうといふ。然るべしとて時を經て一人を得て進むや、時に鳥徑なき所に行き當つて、戻つたりして、行く程に、溪は次第に深く、山は次第に削立して來た。二三十丈程もある山壁の中腹を行く時の如きは、右の荷物が壁に當りて、危く馬が谷底に顚倒しやうとしたので、荷物を下して村人に擔はせ、僅に馬のみを牽いて進んだ場所もある。歸り路には溪上の徑を過ぎてこの難所を過ぎずに濟んだが、往路には不案内の地とて、隨分危い目を見た。難所になると、巡警と村人とが馬に注意して、クワ〳〵と叫ぶ。その陰氣な發音が、いかにも心肝に答へる嫌な氣持を與へた。

進んで河床が唯一枚の大きな青岩であるところを過ぎて、泰山の經峪はこんな石に刻したのであらうと想像せられた。時に險呑であるけれども、この邊から、風光は一歩々々に幽勝を加へて行く。既にして當面の切り立てた樣な凸山の頂上に塔を仰いだ。何ともいへぬよい氣持である。次第に十仞、二十仞、三十仞乃至五十仞の岩の上を渡つて上るが、景色がよいので、危險を考へる餘地がない。またこの道は一本筋で前よりは道も善し、迷ふ氣遣ひもなし、たゞ愉快に上つて、かの凸山を半分廻れば、その彼方に石壁寺が現はれた。巡警も村人も、一度に「來了」と叫んだ。蓋し、共に初めて來たものであらう。況んや日本人では或は予等が初めてであらうと思ふ。

石壁寺は斯くの如く、安定村より山徑十清里の奥に在つて、その途上に一個の煉瓦燒く小屋があるのみ、丸で空山無人の境であるが、而も石橋あり、外門あり、山門あり、鐘樓、鼓樓あり中央の大雄殿は燒失してそのまゝとなつてゐるが、その左右に三堂づゝからなる東西二廂があり、その上に左右に觀音堂があり、その上遙に高く千佛閣が聳えてゐる。この外に小さい堂が四つもあり、別峰の上に塔もある。こんな山間に似氣なき堂々たるものである。

昔法顯三藏は、萬死の中に一生を得て天竺の靈鷲山に詣し、涙ながらに「首楞嚴經」を讀誦した。感激はさる事と思ふ。予の此行は素より三藏の困苦に比して、九牛の一毛だにも及ばぬ。然し心に起る感激によりて、三藏の胸裏に同情し得るだけの喜びを感じたのである。

予は月下に「小經」を誦した。この日は十月二十七日で、故郷では恰も親鸞聖人の報恩講大逮夜に當る。この聖日にこの聖地に參詣することゝなつたのは、因緣の淺からぬを喜ばずには居られぬ。この夜は月蝕皆既に當り、老僧を初め、見よ〳〵とて喚ぐ。横臥すれども夢ならず、時に梟の鳴く音を聞いた。（大正九年十月二十八日）

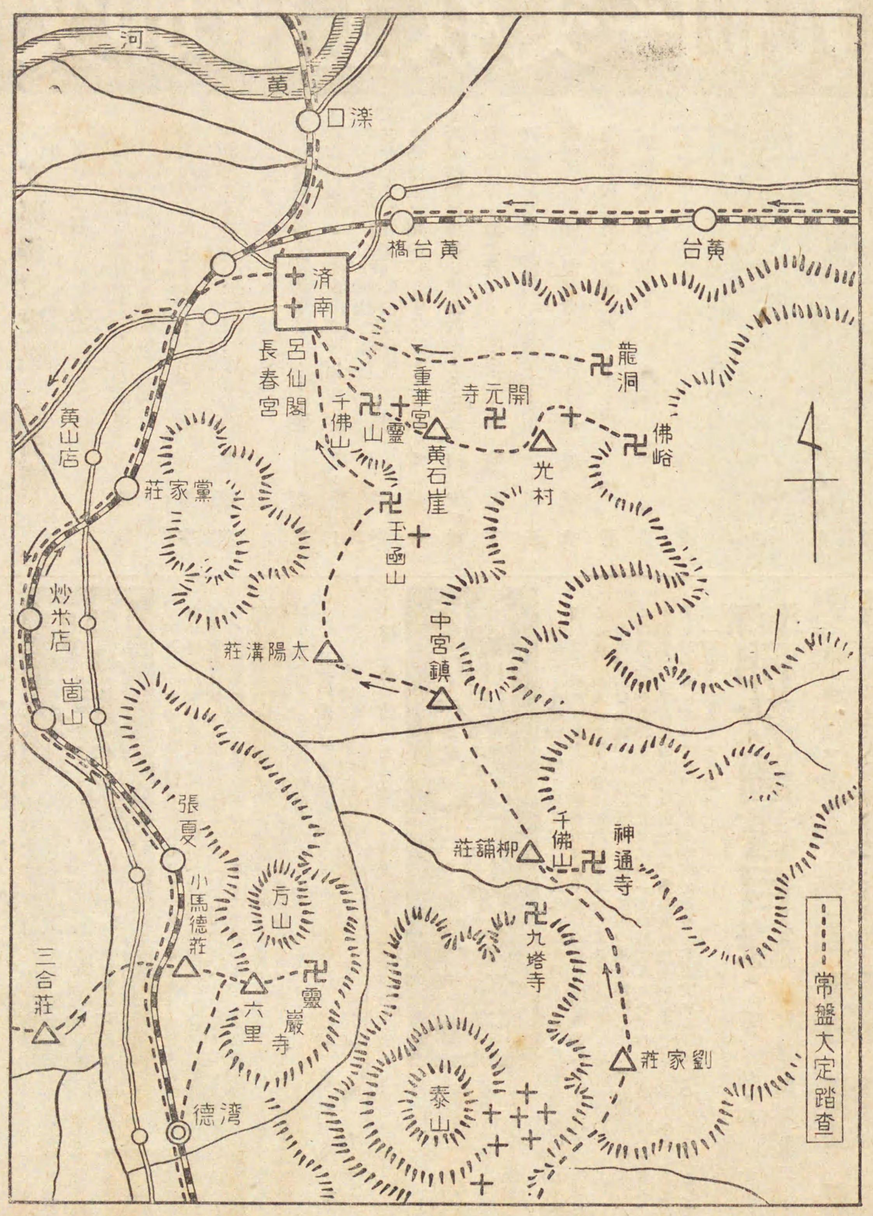
第八回配本
（昭和十五年三月下旬配本）
第八輯　山西・河北・陝西
圖版部　百十葉　百七十圖內外
解說部　百十頁　挿畫數葉

第八輯には山西省の交城、太原、長武、平定、永濟、平遠、應州、楡次、大同等、河北省の趙州、正定、保定、靈壽、元氏、順德、定州、通州、張家口等、陝西省の鄜縣等を收容する豫定である。

交城縣の石壁山玄中寺は念佛の祖師として特に日本淨土教に重要の位置を取る曇鸞大師の遺址である太原縣の晉祠には有名なる唐太宗御書碑がある。河北省正定には四竭三十棒を以て天下に鳴りし臨濟禪師の靈塔を初めとして開元寺塔あり、華塔あり、天寧寺塔あり、猶また大佛寺あり。大佛寺の腰壁の塑像は、この種のものゝ逸品である。趙州の栢林寺は趙州和尚の故地にして、こゝの靈塔は臨濟寺のそれと相匹儔せらるべきものである。

陝西省鄜縣にある石窟の造像は他に異る手法を有し、恐らくは中央文化に緣の少き地方の工人の手に成つたものであらう。第八輯中特に注目に價するものは天龍山石窟であつて、三十七葉六十三圖を之に充てる。天龍山石窟は大正七年六月三十日關野博士が太原附近の遺蹟を踏査中に發見し、初めて學界に紹介せられたものである。その造像は北齊より隋唐時代に及べるものであるが、中に於て北齊時代のもの特に注目に價するものがある。然るに爾來頗る破壞せられて、本書の寫眞に古の面影を保存するもの甚だ多い。

濟南附近略圖



支那淨土教史之研究

支那佛教史學　特別號

目次

支那淨土教の展開……塚本善隆
（漢魏晉南北朝時代）
唐代の淨土教……望月信亨
宋以後の淨土教……高雄義堅
宗教經驗の淨土教的型態……横川顯正
支那淨土教に於ける三乘觀……横超慧日
支那淨土教に於ける逆謗攝不論の展開……稻葉秀賢
支那淨土變相の發生……松本榮一
新羅佛教に於ける淨土教……江田俊雄
道安の淨土論に就て……岩崎敲玄
天台の「五方便念佛門」に就て……山口光圓
曇鸞大師の淨土思想考……惠谷隆戒
道綽教義の背景思想に就て……岸覺勇
「瑞應刪傳」の諸問題……小笠原宣秀
「支那淨土教」研究の回顧……道端良秀
支那淨土教史年譜……春日禮智

菊判二五〇頁　定價金壹圓八拾錢
送料金十二錢

大谷大學教授　龍山章眞著

印度佛教史概說

新四六判・二〇〇頁
圖版十一個・地圖入
定價金六十錢
送料六錢

輓近インド學の發表は目覺ましきものがある。然るに我々が關心を有つ佛教の歴史的研究は未だ完成されたとはいへない。外國人の著述は原始佛教に詳らかにして大乘佛教に簡なるを通例とし、之に反して本邦人の著述は多く大乘佛教に精しくして小乘佛教に簡なる憾みがある。こゝに著者は釋尊出世以前の印度から部派佛教を經て密教時代に至るまでの思想をあらゆる新資料をもつて概説してゐる。恐らく完璧せる印度佛教通史として好個のものである。

教科書用に便宜の爲
菊判にして新装出來

定價金八十錢
送料・十錢

醫學博士　諸岡存校註

校註　喫茶養生記

新四六判・七十餘頁
瀟洒なる装幀
定價金三十錢
送料三錢

茶道は東洋藝術の粹であり、日本文化の綜合體である。日本人の家庭にして茶を喫しない家庭は無く、一杯の茶はよく人の心身を淨潔爽快にしてくれる。茶もし無くんば、我々の生活は實に索然たるものであらう。

榮西禪師は七百年の昔、支那に渡つて茶の種を傳來して、その栽培を奬勵し、茶の功德效用を力説され喫茶養生記の一書を著されたのである。諸岡博士は多年、茶の科學的、歴史的研究に沒頭され、喫茶養生記をかくまでに註釋されたことは、本書を讀む者にとつては、非常の幸福である。茶を喫する我國民の教養の書として是非一讀せられんことを望む。

標準佛教圖書目錄

菊判・八十頁
實費頒價金二十錢

東京　神田神保町一（振替東京二五四一番）
京都　正面烏丸東入（振替大阪一七〇四番）

法藏館

支那文化史蹟

月報
第八號
昭和十五年四月十五日印刷
昭和十五年四月十八日發行
編輯兼發行人　西村七兵衛
東京市神田區神保町一丁目
法藏館
振替東京二五四一番
電話神田三四二八番

長安へ（一）

關野博士『清國河南陝西旅行談』より

河南府から西の方へ進んで七十清里ほど行くと新安と云ふ所がある。之は漢の武帝の時に置いた新函谷關で、楚の項羽が秦の降卒三十萬を坑にしたといふ楚坑は此處にある。藺相如が秦楚會盟の時秦王をして缶を擊たした遺蹟と稱する會盟臺がある。尙西に向いて嶠嶺の險を越えて進めば、史上に名高い函谷關があります。孟嘗君が鷄鳴の客のため僅に身を以て免れたのも此處、老子が黄牛に乘つて這入つたと云ふのも此處であります。昔は此の函谷關を境として西の方を關中と稱しました。弘農澗の急流を渡り、關内に入れば左右兩崖數十丈の絶壁をなし、其の下を一筋の道が通つてゐる。此の道は上下二里許の間急勾配の坂になつて狹くて殆んど車を往き交はすことができぬ。斯う云ふ難所であるから多數の軍勢で通過することは極めて困難であります。所謂一夫路に當れば萬夫も進むこと能はずといふ要害の地である。之を過ぎ、尙進んで行くと潼關に達する。卽ち關中第二の要害で、左に渤漢たる黄河を控へ、右に嵯峨たる峻嶺を負ふて居ります。鄭州以西、此の潼關へ來るまでは一帶に高原地で丘陵起伏して眼界ために狹く、兀山濁水黄塵萬丈で非常に不愉快を感じましたが、足一たび潼關を越せば全く地形が一變して、前面に廣漠たる平野が開ける。卽ち所謂沃野千里天府の地で、心目一新頗る壯快の情を起します。潼關から更に西へ進めば、直ぐと黄河に別れて其の代りに蜀の方から出て來る渭水の右岸に沿ふて行きますが、忽ち左の方に五山の一なる華山を望みます。中々美事な山で、形から云へば日本にある山では富士山を除いたら殆んど比すべきもの無いと云つてもよい程で、山姿奇峭雄拔を極めてゐる。此の山は總て花崗山から出來て居ります。山の下には西岳廟と云ふのがあつて、華山の神を祭つてゐる。此處には漢時代の石碑の殘缺があります。又、後周・唐の石碑もある。宋以後明清時代の者に至りては極めて多數であります。

尙ずつと西の方へ進んで行くと戲水と云ふ川がある。之を渡れば新豐縣である。卽ち歴史上有名な鴻門の會のあつた所であります。其の西に臨潼縣があります。其の南に驪山といふのがある。其の絶頂に周の幽王が狼烟を揚げた烽火臺の跡と稱する所がある。幽王が山の下で犬戎のために殺されてから周の都は洛陽に遷つた。其後、秦始皇帝に至り、天下の徒七十萬人を集めて一方に阿房宮を造ると同時に、一方には此の驪山の麓に壯大なる自分の墓を拵へた。今も臨潼の東一里許の所に始皇帝の陵があります。全體が方形で外城・内城の兩郭から出來てゐたが今は内城だけ殘つてゐる。其の大さは基邊で方二百間ばかり、遠くから見ると小山を見る樣で規模頗る壯快であります。驪山の直ぐ下には有名な溫泉がある。此の溫泉は秦漢時代の皇帝が屢々行幸せられた所であるが、唐時代になつて溫泉宮が建てられた。之を玄宗皇帝の時に華清宮と改稱し、冬期には每年皇帝が此處に行幸せられ、文武百官は皆隋從して來たものである。詰り長安の方は夏の宮で華清宮は冬の宮であつたのである。今ある所の溫泉は白樂天の長恨歌で有名な楊貴妃が凝脂を洗つた華清池だと傳へられて居ります。池の緣や底には皆大理石で築かれ、其の上を煉瓦を以て穹窿狀を造り、更に其の上に樓を築いてゐる。此の溫泉には普通の支那人は入れない。たゞ官吏とか身分のあるものが入るだけであるが、日本人が行けば特に入れて呉れます。此處から更に西に向つて行くと灞水がある。此處に架つてゐるのが灞橋であります。昔は長安から人が東の方

へ旅行するときは親戚友人がこの橋まで送つて來て、此處で柳を折つて別れたもので、今でも柳の古木が澤山あります。それから灞水に架つてゐる灞橋を渡つて始めて西安府即ち昔の長安の都につきます。西安府は即ち唐時代の長安の都である。一體此の地は所謂關中の大平野の中心に當り昔から早く開けて居つた。此の西安府の西方に豐水といふ川があつて北の方渭水に注いで居る。此の川の西の方に豐といふ所があつた。即ち文王の豐宮のあつた所である。又東の方に武王の時、鎬京を營まれたが、之が其後の周の都となつた。又秦の始皇帝の咸陽宮は今の咸陽縣の東方、渭水の北岸に在つて、河を距てゝ阿房宮が作られた。其後、漢の高祖の時始めて都を長安に營まれたが、今の西安府城の西北に當りて未央宮・長樂宮などが建てられた。隋の文帝の時に此の漢の古城から少しく東南に離れた所に大都城を築いて之を大興城といひました。これが引續いた唐の長安城となります。此の都城は規模頗る壯大、東西約我二里十八町、南北約二里四町、面積五方里二七程ありました。今の我東京市の廣さは四方里七であるから、彼の方が一層廣かつたのです。都城の中央北部に皇城宮城がある。皇城は宗廟社稷諸官衙を置いた所、宮城は即ち內裡であります。又唐の高祖の時都の東北方に大明宮を營まれた。之が其後の皇居となつた。玄宗の時更に都の東方に興慶宮を置かれたが、其の內に有名な瀧池沈香亭などがありました。都城の內は東西南北に大路を通じて區劃整然たる者であつた。此の大路で限られた區劃を各坊と稱し一々名稱がつけてありました。之を我國の寧樂・京都の制度と比較して見ると、其の廣さに於ては寧樂の都は長安城の恰度四分の一、京都は四分の一强であるから、規模の大小は到底比較にならぬ。併し大小路のつけ方、市街區劃の方法、宮闕の制度に至つては寧樂・京都の方が遙かに進歩し遙かに整備して居つた。即ち我に於ては當時多少彼の制度を參考したが、決つして彼を模倣したのではなく、却つて彼よりは一層發達した立派な都城を作つたのである。即ち此の點に於ては大に誇るべき者があると思ひます。（續く）

（明治四十年二月講演筆記）

天龍山へ

常盤博士「古賢の跡へ」より

予は大正九年十月二十九日夕を以て首尾よく石壁寺より還つて晉祠に至り晉祠內の多くの壁碑や奉聖寺や懸甕山麓の萬佛塔などを、日の暮れぬ中にと急ぎあさつて見たが、遂に當時の懸甕寺らしい何等の痕跡をも求め得ぬので靈辨の遺址搜査を後廻しとし、翌朝直に天龍山に登る事とした。幸に太原府より賃して石壁寺に至れる轎車の馬夫が、天龍山を知つて居るといふので馬を僦ふなど避けて脚力によることとし夫に寢具を擔はしめ、これを東道者として出發した。往きには捷路なりとて山越えの間道を採る事とし、懸甕山溪を上るに、左右に側立せる岩石ますます高くして人ます〳〵小である。登り登つて一つの峰を越ゆれば、彼方の下り目に僅少の人家があり、石を疊んで居を構へてゐる。これより下つた平地が柳子峪である。これより第二の峰を越ゆるのであるが前峰に比して一層の困難で、忽ちにして滿身を汗せしめた。頂上に登り終れば前方に天龍山が見え、右の方に谿を隔てゝ二小塔のある部落が見える。登り終へ幾分下つて峰つゞきに、天龍寺に行くのである。馬夫も徑路を熟知せず、少し惑つたが往き〳〵て峰を周れば、忽ち天龍寺が前面に現はれ、眼下に大喇嘛塔あり、寺の左方高い所に大佛閣が仰がれた。

天龍寺はかゝる山間に似氣なき大伽藍たること石壁寺に等しく、而して新らしいけれども、石壁寺より一層の莊嚴を有する。先づ天王殿には表に二王があり、內に喇嘛式四天王がある。次に門の內側の左右に二小堂があつて、老子らしい像と、達磨とを安じてゐる。老子らしいものは、或は傳大士で

第九回配本（昭和十五年五月下旬配本）
第九輯　陝西　西安及び其附近
圖版部　百五葉　百九十圖內外
解說部　百二十頁　挿畫數葉

もあらうか。次の大雄寶殿は、左右に十二神將を安ずるより見れば、中尊は藥師で、右手は法身說法印を結び、左手は入定印を結び、二菩薩を挾侍としてその背後に觀音、文殊、普賢の三尊がある。堂內に於て珍らしいのは佛・十六羅漢・四天王を陽刻せる銅船であつた。明の嘉靖年間の造である。次の大殿はまた大雄寶殿の額を有するけれど、「縣志」に藏經樓とあるもので、蓋し毘盧殿といふを適當とする。智拳印を結び二菩薩を挾侍とする中尊毘盧遮那と、右手說法印・左手與願印を結び一菩薩を右とする西方彌陀と、右手法身說法印・左手入定印を結び、一菩薩を左とする東方藥師の三尊を安置し一方に藏經がある。明の北藏であらう。現代の支那には珍らしいものである。

藏經閣の後に二洞あり、一洞には布袋・寒山・拾得の銅像を安じて居るが半身土中に埋まつてゐる。佳作でない。寺の南方三丁程の距離に三個の塼塔があり、また寺の北方の圃中に一塼塔がある。更に東北十丁許に一大塼塔がある。これ前に眼下に見た喇嘛塔で、中に觀音・文殊・普賢の三尊と、十六羅漢とを安ずる。十六羅漢の中に、達磨を加へて居るが目に立つ。

寺內に約十一の碑があつて、その中の二個の明碑に、寺の緣起を記してゐる。これを見れば、この寺が悉く廢滅に歸せる際に、明代の石潭——「通志」「府志」の道水であらう——なるものゝ再興せる所にして、この石潭はまた石壁寺・童子寺の再興者であつた事が知られる。石壁寺、並にこの寺の材料を綜合して考ふるに、蓋し元代に於て共に再興せられて、判然禪寺となり、更に明代に至つて復興せられたものである。山上の大佛閣も、諸殿も、諸尊も明代に成れるもので毘盧・大雄二殿の三尊・藥師並に挾侍の諸菩薩は、明代の傑作であらうと思ふ。

もと寺の東の池中に龍王廟あり、千佛樓ありしとの事であるが、今は廢滅して跡方もない。寺の北、石窟に登らんとする邊に、日午中天堂といふのがあつて、中に道像を安じて居る。明代に至つて廢滅に歸し、天龍寺に合せられた仙岩寺は多分との中天堂の邊にあつたらうと思ふ。

石窟は北齊の皇建元年の創造で「府志」には『石室二十四龕・石佛四尊あり、隋の開皇四年に石室銘を鐫る』とある。二十四龕の中、今日十四窟を見得る。他にも離れた所にあるとの事だが、これを踏査する暇はなかつた。石佛四尊といふのは、大佛閣の上一尊下三尊といふのであらう。「府志」は實地踏査せぬ人の筆に成つたものであるから、二十四龕悉くが北齊に成り、その前に隋碑がある樣に記され、混雜して居るが、實際に踏査した上に、關野博士の專門的觀察を加ふれば次の如くになる。

第一、北齊時代——左右の壁に樹下靜觀だの、文殊だの維摩だの、進香行列だのを陽刻せるものが殊によく、これを拓する事も出來る。但し砂岩石の爲に、その印象は明白を缺くを免れぬ。天井の天人も淺い陽刻であるから拓し得るが、これには容易ならぬ設備がなければならぬ。正面の三尊左右の羅漢は如何にも北齊の特色を示す。

第二、北齊時代——左右の壁の香爐を持てる羅漢、合掌恭敬の信士、天井の天人など、各々特色あつて、古拙の間に人を惹きつける力がある。

第三、第四、第五、第六、初唐時代

第七、隋時代——表の壁に隋刻の銘文がある。「府志」に開皇四年の銘を鐫つたとあるのはこれをいふので、中の佛像は注意すべきものである。

以上は北峰にあり、更に谿を隔てた南峰に七窟ある。全體この石窟山には登る道がない。急峻な斷崖で、踏むに隨つて崩壞せる砂岩が崩れ去るので、道がつけられないのである。

第八、北齊大佛、初唐三尊——階上の大釋迦は殊によい。階下の觀音、文殊普賢はこれに比すれば餘程新らしい。これを蓋ふ樣に、明の正德年間、道水が高閣を建てた。この高閣、今や頽廢して動もすれば踏み拔くべき虞ある程になつて居る。大釋迦は、レンズを向ける適當の距離がないので、善く撮影する事が出來ぬ。

第九、北齊、初唐

第十、第十一、第十二、初唐

第十三、北齊の仁王あれども登れぬ。

第十四、初唐のものであらうが、登れぬ。

斯くの如く可なりに多く北齊時代の藝術を有するのは、天龍山石窟の長所で、以て雲岡、龍門の間を補ふ事が出來る。

晉祠から山越えの間道は二十支里位のものであらう。八時頃に出發して六時頃に著し、食事後直に先づ南窟に登り、拓したり、照相したりして後、北峰に登り、晚陰になつたので、明日を期して下り、翌朝は未明に起きて寺の內外を踏査し、朝食後齒痛の同行者を寺に留め、獨り北峰に登つて心靜かに拓し、午後に及んで切りに呼ぶので、急いで又南峰を一巡して、下つて晝食し、午後二時頃に發足して、喇嘛塔下を過ぎ牛家口を經て、夜に及んで晉祠に還つた。（大正九年十月）

支那文化史蹟

月報
第九號
昭和十五年十月六日印刷
昭和十五年十月六日行發
編輯兼印刷發行人　西村七兵衛
東京市神田區神保町一番地
法藏館
振替東京一四五二番
電話神田三四八二番

長安へ（二）

關野博士「清國河南陝西旅行談」より

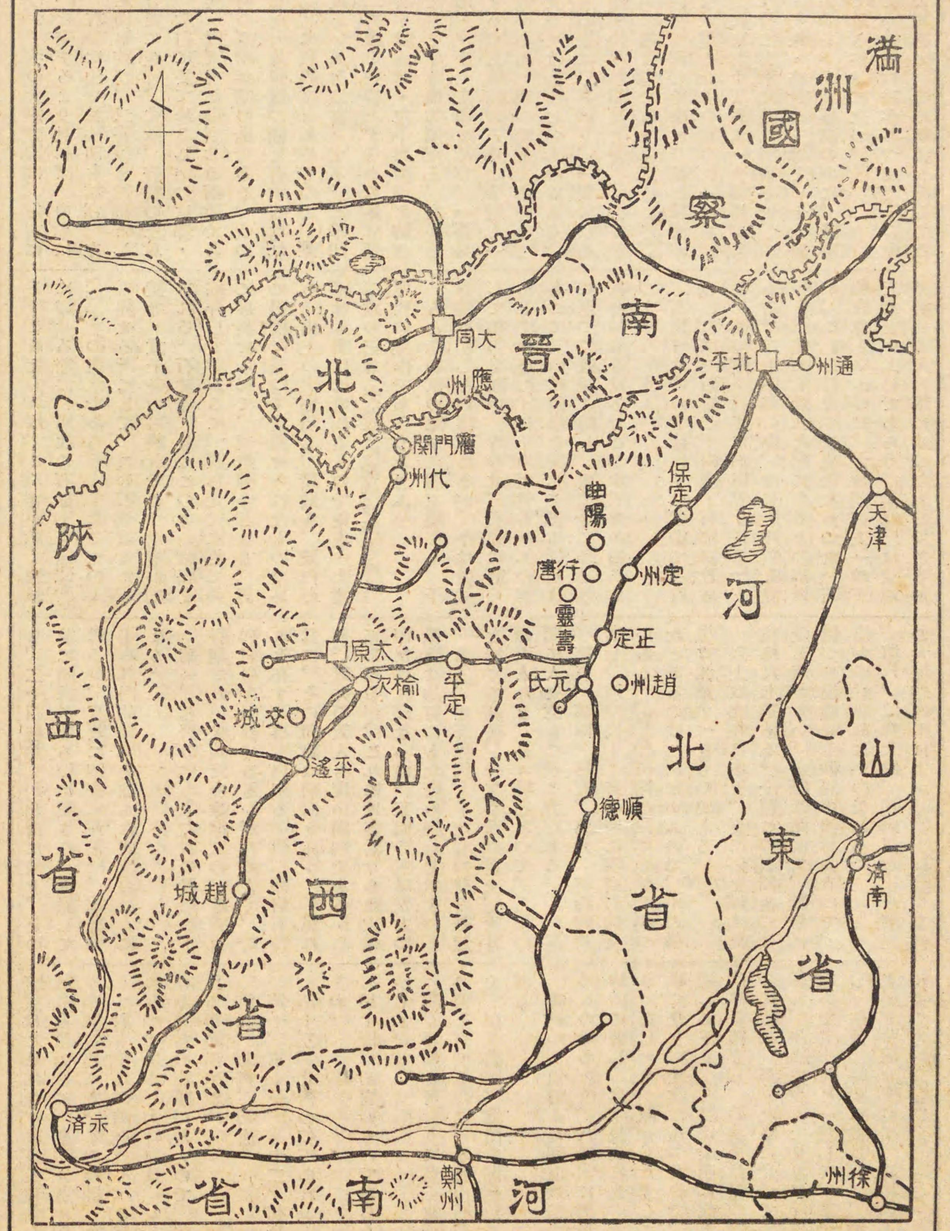
今日の西安府城は當初の面積の六分の一に過ぎぬが、猶東西約一里、南北約二十二町、人口十五萬内外を有する大都會である。唐時代には多分百萬以上の人口を有して居つたであらうと思はれる。

隋唐時代には都城内に多數の大伽藍が建立せられたが、今は大抵廢滅して僅かに殘存せる者に薦福寺があつて、唐初に出來た小雁塔といふ煉瓦の十三重塔が立つて居る。又、慈恩寺には唐高宗の永徽三年に建てられた大雁塔と稱する煉瓦の七重塔が猶遺つて居る。此の塔の初層の壁に唐太宗の撰文である大唐三藏聖教序碑、高宗の撰文である聖教序記碑が嵌めてある。何れも褚遂良の書いた見事な者である。又興善寺があります。曾て不空三藏のねました所。石佛寺があります。即ち唐の青龍寺で、我國から弘法大師が入唐した時、此處に惠果阿闍梨に就て密教を學んだ所であります。又唯今の西安府城内に大規模の文廟があつて、其後に唐宋以後の石碑を數百種保存して居る所の碑林がある。碑の中では歐陽詢・虞世南・顏眞卿・歐陽通・徐誥など唐の名臣の書いた者が特に見事である。此外に張旭懷・素蘇・東坡・趙子昂・黃其昌など有名の書家の書の石刻もあります。又、唐の開成年間に刻した十三經の石刻は特に驚くべき者である。是等の碑は大低堅緻な黑大理石で出來て居て、螭首側文等の見るべきもの少くないのであります。此の文廟の附近に寶慶寺、一名花塔寺といふ寺があつて、其の佛殿内の壁に多數の唐時代の石佛が嵌めてある。又城の西門外にも崇聖寺といふのがあつて有名な大秦景教流行中國碑が荒れ果てた野中に唯一つ立つてゐる。又西安府の南六十清里許に終南山が突兀として空に聳えてゐる。西安府から此の山に至るまでの間には唐時代の伽藍が多少殘つて居る。其の中で西教寺（府南六十清里）には玄奘三藏の塔、慈恩大師・圓測法師の塔が竝んで立つてゐて、何れも開成年間に出來た煉瓦の塔である。香積寺（府南二十五清里）には唐時代の塼塔がある。又府の東南二十清里に漢の宣帝の杜陵がある。基邊方五百五十尺許の方墳で、其の附近に多數の陪冢が散在してゐる。

私は西安府を中心として其の近傍を調査し、更に二週間許り北方を旅行致しました。其の間に一覽した主なる者は先づ西安府を發し北へ三十清里許り參りますと、渭水がある。渡船で渡るのです。暴風雪の中で船を待つのに三十分、船に乘つてから向岸に着くまでに三時間を費やしました。これで河幅の廣いのと船頭の暢氣なのが分ります。渭水の北岸は畢原と稱し、周漢時代の陵墓が多數殘つて居る。私は漢の惠帝の安陵、景帝の陽陵を見ましたが高祖の長陵は見ることが出來ませんでした。安陵・陽陵共に方墳式で四面に闕門の址らしい者が殘つてゐます。

涇水を渡つて更に北に進めば三原縣（西安府から九十清里）に達します。其の附近に木塔寺と云ふのがあつて、三重の木塔婆が立つてゐます。一體、此の地方は樹木が不足なので、塔の如き建築は皆煉瓦で築きますから木造の者は極めて珍らしい。三原縣の西北五十清里に嵯峨山が峙つてゐて、其の上に唐の德宗の崇陵がある。先づ前面の左右に石華表が一對立つて居る。八角柱で高三十尺許、各面に雄麗な唐草模樣を彫り付けてゐる。次に龍馬一對、石鳳一對、石馬五對、石人十對といふ順序に左右に相對して竝んでゐる。次に高二間許の大なる石獅子一對あつて次に陵があるべき筈であるのにそれらしいものが見當らぬ。或は後世破壞した者でもありませうか。關門から此の

太原・正定附近略圖



石獅子まで凡千七百尺即ち三百間許、道幅が四十間程、中々規模の壯大な者であります。私は此の崇陵から涇陽縣へ參り、それから西北に道を取て唐の太宗の昭陵を調査しました。

昭陵は九嵕山といふ高さ五千尺許の山の絶頂に作られたのであります。之までの支那の陵墓は何れも平地に起した者で、其の中で最も大きな者は秦始皇帝の陵で高さが五十丈、之に亞ぐのが漢の武帝の陵で高さが十四丈、其他は十二丈以下五六丈に過ぎない。唐の太宗の時に始めて陵を山上に築くことになりましたが、一方民力を勞することが少なくて、却つて規模の雄大なるものが出來たのであります。此の九嵕山は恰度富士山の樣な形で一層勾配になつてゐる。其の南の方數百尺の絶壁になつてゐる所に横穴を七十五尺鑿つて其の内に棺を藏め、北方勾配の稍緩なる所に玄武門を立て、其の外に多數の石人石馬の屬を立てたのであるが今は一つも殘つて居らぬ。唯玄武門内に太宗の愛馬六駿の石像のみ昔のままになつてゐる。何れも半肉彫りで、生氣活動寫實の妙を極めてゐるが、中に太宗親ら馬の胸に立てる箭を拔く所と傳へられる者は特に見事で、唐時代の服裝・馬具等の絶好の參考物である。山上山下には公主・妃嬪・文武の功臣の陪冢が百七十餘、累々として三四里の間に散在してゐる。其の規模の壯大なる流石不世出の英傑の陵墓と感嘆の至りに堪へぬ。是等の陪冢には當初何れも碑石があつたのであるが、今は大抵なくなつて僅かに三十許殘つてゐる。其の内には房玄齡・溫彥博・李勣・李靖・尉遲敬德・褚亮・孔穎達などの碑がある。私の參りました時には恰度、大谷光瑞師が山下に天幕を張つて二週間滯在して熱心に研究され、之まで所在の知れなかつた石碑を三四個も發見せられました。何れ此の昭陵に就て委しい報告が出ることと存じます。

昭陵の西、武將山には唐・肅宗の建陵がある。又更に西々北に往けば、乾州城の北十清里に唐宗と則天武后合葬の乾陵がある。此の陵は唐代の陵としては最も完全に保存されて、總ての設備が當初の儘殘つてゐる。此の陵は梁山といふ山の上に築かれたので、遠くから望めば四面に二邱竝び峙し、其の上に煉瓦の闕門が相對して立つてゐる。其の間を上れば十五六町許、平曠なる所があつて正面に陵が聳つてゐる。先づ入口に石華表・石龍馬が各一對あつたが今は草むらの中に倒れてゐる。一町許進めば石鵝鳥一對・石馬五對・石人十對道を挾み或間隔を以て行儀よく竝んでゐる。次に塼築の闕門・述聖碑・無字碑・石番酋・石獅子等次第して立つてゐる。此の石番酋は則天武后が當時唐の勢力を後世に誇らんがため、來朝した諸番酋の像を二十餘作り左右に分けて陵前に立てたもので、昔は其の背に各名を彫り付けてあつたのであるが、今は一つも讀むことが出來ぬ。又番酋の頭部も殆んど悉く壞れてなくなつてゐる。兎に角、唐初の規模壯大にして完備せる唯一の陵墓であるから、其の研究は頗る興味のある者である。

私は此の乾陵を見て東南、醴泉縣に至り、咸陽縣に戻りましたが、此の咸陽縣の北方は卽ち畢原で、周漢時代の陵墓が累々として碁布してゐる。其の數の夥しきこと幾千を以て數ふる程である。其の中で最も史的感興を催したのは周の文王・武王などの陵である。文王の陵は東西約三百七十五尺、南北約三百二十尺の方墳で、頂が比較的廣くなつてゐる。其後に武王の陵がある。これは徑約二百二十尺の圓錐狀をなせる墳である。一體支那の古陵墓は大抵方墳式で、圓墳の者は殆んど見當らぬ。尤も後世の者は圓墳が却つて普通である。文王のもも眞否は保證し難いが、特に武王の方は一層疑はしい。又文王陵の前面左右に成王・康王の陵があり、左方に周公・太公・魯公などの墓があるが、何れも方墳式である。又此の附近に漢元帝の渭陵を初めとして漢代の陵墓が多數立つてゐるが、周陵に比すれば何れも規模壯大で、且つ方墳ではあるが、數層の段狀をして一見彼と區別し得るのは面白い。私は是等の陵墓を一通り調査して渭水豐水を渡り、西安府に歸りました。

當初の豫定では西安府から秦嶺を越え襄陽に出て漢水を下り漢口に出づる筈でしたが、冬期水少く舟行極めて難儀であると云ふことを聞きましたから豫定を變更して元來た道を鄭州まで戻り汽車で漢口に着し、汽船で、長江を下り、上海に出て歸朝しました。（終）

〔明治四十年二月講演筆記〕

第十回配本　（昭和十五年七月中旬配本）
第十輯　四川・湖北・江西・安徽・江蘇
圖版部百五葉　百九十圖内外
解說部百二十頁　挿畫數葉

廬山巡禮（一）

常盤博士「古賢の跡へ」より

大正九年十二月二日　最近に廬山を踏査した諸橋轍次君より、種々の經驗談を聞き、地圖も寫し取つた上に、漢口の宮下萬次郎氏から「廬山志」を借り、宜昌府への上下の船中に於てこれを通讀して、かねての取調に加へて、一層能く地理と事蹟の觀念を明瞭ならしめ、猶ほ宜昌で『白鹿洞志』を求めたので、これをも併讀して大體の豫定表を作り、五六日間に廬山巡禮の目的を達しようといふ考へを定めた。この豫定中には、五老峰登攀の如き風流韻事は、勿論加へてゐないのである。然るに長江沿岸に來てから、天氣が惡い。漢口でも、宜昌でも、沙市でも、多くは曇天又は細雨であつた。九江府についたのが十二月の二日で、その日に登山と思つたが矢張り無情の細雨が時に見舞つてくるので、明日の好晴を豫期し、白藥天の故跡といはるゝ古琵琶亭を觀て、その日を暮したが、一向注目に價するものがない。

琵琶行の眞跡は、九江城中を貫通する運河であらうといふ考證もあつて、その方が事實と思はるゝので、匆々にして去つた。運河は現今大小の船舶が、水面を覆ふまでの雜踏を極むる小河で、楓葉荻花秋瑟々の雅びは、毫も追懷せられぬのである。

翌三日が、またしても昨日にまさる雨であるが、さて止むべきでない。大元旅館主人增田久次郎氏の東道にて、折しも來合はした堀幸壽氏と、四人かつぎの轎を、三臺列ねての行列、渡支以來初めての殿樣振である。降雨の際の登山であり、主人の東道である。

府を出でゝ南に向へば、左方に南門湖に沿ひ、右方遙に甘棠湖を望む。南門湖には湖心亭あり、湖を隔てた對岸に大きな塼塔が聳え、まだ見ぬ西湖の風景をさへのばしめる。既にして十里堡に至れば、濂溪墓の標石がある。僅に五支里といふのであるが、歸路の好晴を豫期して、ともかく廬山に急ぐ。蓮花洞に至つて、風光頓に更まつたが、入り口の丘陵・村家・秋葉・樹林そのまゝ田中賴璋畫伯の風景である。三山澗の溪流を登れば、一歩々々に趣を加へて行く。この山徑の最急坂といふ石段を登り終れば、右方眼下に平原を俯瞰し、、東林・西林の二寺を望み得べしとの事なるも、濃霧の爲に少しの展望もない。既にして千仞の巨巖峭立して、天地を貫くとも思はるゝ勢をなせる中腹を過ぐるのであるが、これは山内多門風の畫圖である。轎夫にその名を問へば天地峰といふ。小天池の裏面であらう。

頂上の牯嶺街は、頗る繁昌で、本邦の箱根街にでも來た樣な氣がする。街中を横ぎる烏龍潭は、東林寺に至つて虎溪を成すものであるといふ。支那街を過ぐれば、有名な英租界となる。一宣教師の經營によつて、その基礎を置き斯かる發達を來したものとの事であるが、實に堂々たる別莊地である。租界の最南は大林峰下の大林寺址で、こゝに大元旅館の別邸がある。

さて大林といふのは東晉の代、慧遠の弟子曇賢がこの峰に花樹を植え、大いに繁茂せる所に名を得たと傳へられる。大林寺址は西に大林峰を望み、東に擲筆峰を仰ぐ。擲筆の名は、慧遠が「涅槃經」の疏を製し終りて、筆を擲てるに起因するといふ。また大林峰の南に講經臺址があり、慧遠講經の址である。また大林寺の前には、白蓮池あり、擲筆峰の北面には彌陀菴があつたといふ。更に大林峰の西に慧永の菴址があり、兩峰の間を流るゝ溪流を錦澗と名づけて、これに香谷の名があつた。慧永の念誦の功によつて、人ありこゝに至れば異香を聞きしに基いたといはれる。

旅館の前で、竹内照相館主人に迎へられ、卽日同館を訪へば、上田萬年學長や、萩野由之博士の手蹟に接し、なつかしい思ひがした。その頃は大元旅館がなかつたので邦人の登山するものは、必ず竹内邸に宿したのである。

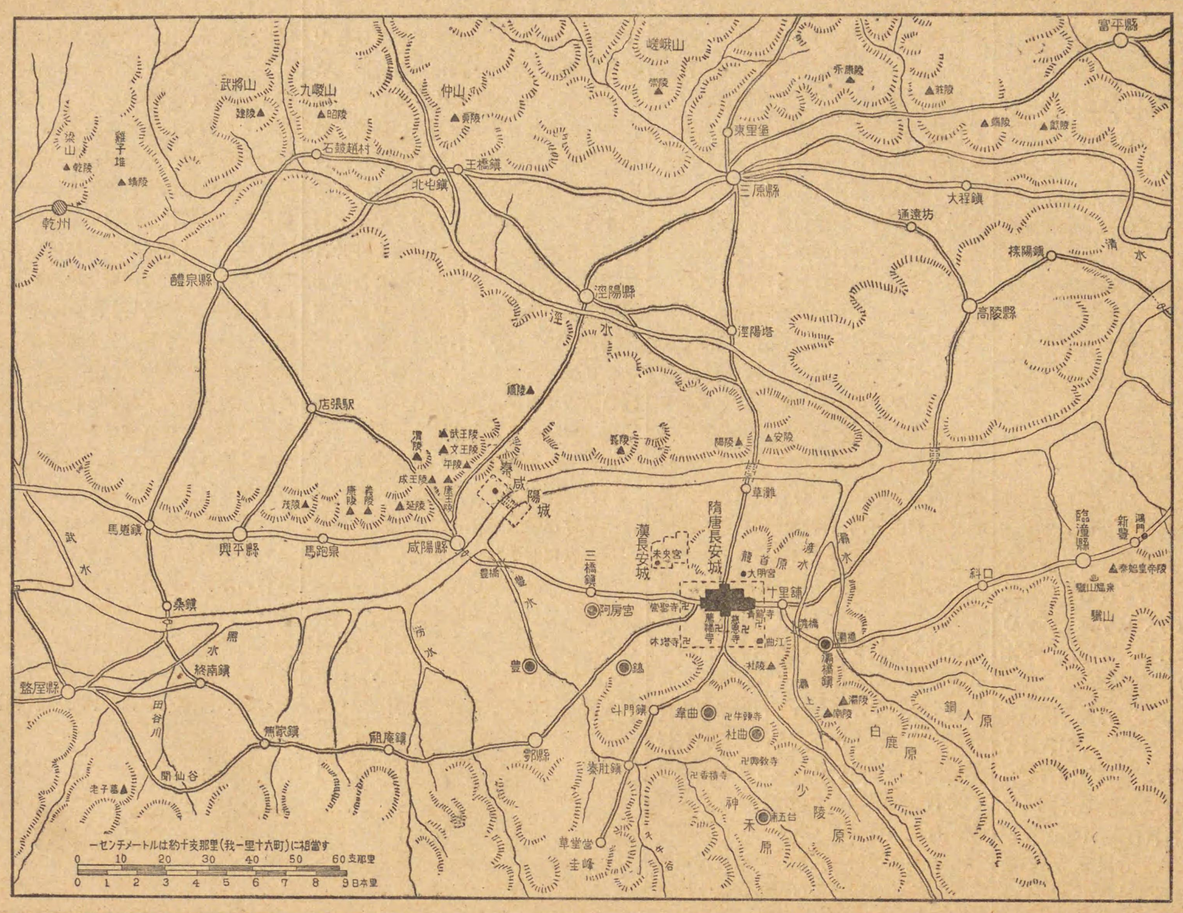
翌四日もまた曇天で、折々細雨を誘うて來る。朝食前、獨り大林峰に登る食後、竹田增田二氏の東道によつて天池寺に向ふ。

寺の西に龍首巖といふがあつて、直立千仞の谿に臨む。もとは捨身崖といふ名で呼ばれたといふ。細雨がふりやまぬので歸路に向ひ、東北に進めば白塵昇仙臺あり、明太祖御碑亭あり。御碑は周顚仙人なるものを頌せるもので、仙人は佛手巖といふ洞窟にその影を止め、この後、佛手巖は仙人洞の名を以て呼ばれるのである。洞の背後に竹林寺址があり、この邊りから天地寺に至る岩石には頗る石劃が多い。（續く）

★
★

陝西西安府附近史蹟圖

（足立喜六氏原圖に據る）



支那文化史蹟

月報

第十一號

昭和十五年二月六日印刷
昭和十五年二月十日發行

編輯印刷發行人　西村七兵衛

東京市神田區神保町一
法藏館

振替東京二五四一番
電話神田三四二八番

山東巡禮行

常盤大定「續古賢の跡へ」より

土匪多き兗州城

山東省の兗州治下すなはち古の魯の地は、孔孟二夫子の廟あるに拘らず、人心の荒廢甚だしと見え、草賊到る處に出沒して、護照には常に『東兗一帶不靖』と條件つけられてある。この不靖の地に踏査したい故址が頗る多い。乃ち地圖を案じて、先づ鄒縣より始めて曲阜寧陽兗州濟寧の諸地に向つてやゝ規模の大なる遊歷の途に上つた。

初日には鄒縣に至り孟廟に詣して居る間に暮靄に包まれ、縣城に向つたら南門外に三遷故址と題せる石門がありその側に孟母斷機處と刻せる石がある。いひ知れぬ感懷禁じ難く、忽ち時間を超越してそこの小廟に詣したが爲に日暮となり、城中に入れば客棧では無有房の一言の下に斷られ、殆ど强制的の乞食に取りまとはれ、旅のわびしさが身にしみつゝ再び城外に出で、辛くも何ともいひ樣のない客房を得て、とれでも膝を安んずるに足ると、高粱の上に腰を下せば、警吏が五六名來て、城外は保護し難しとて一の警士に東道せしめて、先客を他に移して特に予等を宿せしめ、終夜二名の警士を附して警護してくれたのは實に有難かつた。

翌日五六名の警吏警士に送られて孟子墓に詣し孟母墓に詣して曲阜に直行した。曲阜の孔顏周三夫子の廟、夫子・伯魚・子思の墓については、今更言はずもがなである。普通の行客の知る通りである。曲阜から予は西の方六十支里の寧陽城に向ふ事とした。保護を受くるは有難いけれどもまた不便もあるので、この時は一種の方法にて單獨となり、警士なしに直行した。また日暮に到着したので、無有房の爲に城内に宿するを得ずして城外の言ひ樣のない客房に宿する事となつた。土室・煤煙・塵埃、況んや臭虫の加はるわびしさは、かゝる僻地を旅行した人に非ずんば知るべからざる經驗である。今年は時候の少しく早い爲にや、片手だけにも積り積りて臭虫の痕跡二十以上を留むる殆末、これだけは逃れやうのない苦痛である。辛くも夢を結んだと思ふ時、ドヤドヤと扉を排して兵士及び二三人が亂入した。事こそ起れと思つたら、豈計らんや縣吏が兵士を伴ひ來つて、仔細に目的を聞き糺し、またも二名の兵士を附して終夜外面を保警して呉れたのである。予はつくゞ〳〵支那官憲の保護に感謝の意を表した。斯かる一種の冒險を敢てし、官憲の費心を得て、而も習日北方二十支里外の佛山に至れば思ひの外につまらぬものであつたが然し踏査せんでは有無も可否も決定出來ぬから、遙々と來た甲斐が無いとはいはれぬ。

この日直に六十支里の兗州城に向つたが思ひの外の惡路なので、遂に二十支里手前の小村に行き暮れて、如何とも致し方がない。辛くも莊長に依賴して觀音堂を開いてもらひ、こゝに宿するを得たのは山東省旅行中の最頂の危險と歡喜であつた。この夜こそは蚤にも臭虫にも襲はれずして眞の安眠を得て「日暮れて小車また行き難し、路程猶遠し兗州城、里人廟を開いて吾膝を容れしめ、慈眼尊前客夢半かなり」と、この夜を喜ぶ快を得た。翌日早く出發して十三支里行つて、途ある辻堂の石碑を見てゐたら、百姓が特に歩を止めて、前々夜こゝで一軍人が路劫の爲に斬殺されたと教へて呉れた。

兗州にては隆興寺の塔を探り、唐代の法集寺を尋ねたけれど、到底分らぬので、直ちに濟寧に至り、太百樓や文廟や鐵塔寺や、普照寺や、清眞寺やを探つた。普照寺は今日監獄署に充てられてゐる。堂中に一の大碑が保存されて居るのでこれを拓しようとて準備に取りかゝつたら、獄長が親切にもその

拓を取り寄せて特に寄贈してくれた。

斯くの如くそちこち遊歷する間に最も多く目に止まつたものは、節婦とか孝子とかの勅褒の石碑である。一村落に二個三個の見えぬ所はない。予はとれを見る毎に、却つてその背後に隱れた或るものを感ぜざるを得なかつた。而も勅褒とあるにて、坐ろに滿州朝廷の最後の苦鬪の跡を見る樣な感がした

徂徠山の王子椿

山東の徂徠山は汶河を隔てゝ泰山に對し、泰山よりは低いけれども相當の大きさを有し、泰山と共に容姿秀絕の山である。その有名なるは、これを古にしては唐の李白が五人の朋友と共にこゝに遊んで、日々痛飲して人世を超絕せんと努力し、自ら竹溪六逸と號した事に因り、これを後にしては、宋初石守道といふ者がこゝに居を占めて對岸の孫明復と相並んで宋初儒界の二大明星と呼はるゝに由る。孫明復が泰山の號を有するに對して石守道は徂徠の稱を有するが、人物の點からいつても、宋儒に對する影響からいつても、矢張り山の大小の正比例する樣に思ふ。予がこゝを尋ねたのは、竹溪六逸の址、石守道の古を尋ねたい事も加はつて居るが、主として映佛巖の般若經石刻を見たいが爲であつた。この地は土匪の隱れ場所として開えて居り、人跡絕えるといふ狀態であるが、予は自ら恃む所があるので躊躇なし進入したが、幸ひにも何等の事變にも遭遇せずして、首尾能くこれを調査し得た。こゝに光化寺といふ寺があつて今では落魄してゐるけれども、泰山の靈巖寺と並び稱せられた名刹であつた。有名な石刻の存するもこれに因る。

石刻は泰山の經石峪の堂々たるに比して遜色あるけれども、然し相當に大きい。而も立派に武平元年の年號を有し將軍王子椿の名を有する點に於ては泰山に數歩を駕する。泰山の金剛經が何人の筆に成つたかにつきて古來の議論まだ盡きぬが、予は徂徠山のを見て疑ひもく王子椿といふ確信を得た。王子椿は、石刻經中古今第一の人といふべきべきである。

予は頗る努力してこれを拓し、泰安府に著いた夜、拓本屋が賣りに來た中の該經を見て、餘りに上出來なるに不審を懷き、我が拓せるものに比較したらたしかに贋物なるを發見し得た。そのもとはとの石刻より來たに相違ないがこれを更に石または紙に刻して覆拓したものである。更に第二の拓本屋が來て同一の經刻を見せたのを見ると、これまた予のにも第一の拓本屋のにも異つてゐるので、贋物なる事を指摘す樣なことは絕對にありません。本紙上を以てお答えいたします。

◇「支那文化史蹟」至十二輯もあますところ豫告の通り第十二輯「河北」（北京附近）となり、これを以て終了することになりましたが、「內容見本」に豫告いたしております「滿洲・蒙疆」篇が、十二輯外にはみ出すことゝなります。從つて「滿洲・蒙疆」篇は續輯として刊行いたします。

詳細については第十二輯月報上に發表申し上げます。

出版者より

◇第十一輯の發行が甚だ遲れましたことをお詫び申上げます。御覽の如く本輯に收容いたしました圖版は殆んど全部が著者の新發表のものばかりでありました。從つて製版に甚だ手間を取り、發刊遲延を來たした次第であります。

◇讀者より用紙の缺乏のためでないかとのお問合せも御座いましたが、發刊と同時に全輯の用紙を準備いたしておりますから、用紙不足を來たしたら匆々として出で去つた。予は是に至りて同じものに二種の贋物まであるに驚いた。然しその贋なるを發見したのは自らこれを踏査して隨分努力して自らこれを拓したが爲である。何事も自らこれを實驗せずしては安心することが出來ぬ。支那の拓本に對して、無條件に信用してはならぬと思ふ。

徂徠山より泰安府に向ふ途に於て石徂徠先生の神道碑を探り得たのは仕合である。汶河を徒涉して後、予は地勢上より視察して、孫泰山先生の居たのはこの邊だらうと思ふので、種々に試みて多くの人に尋ねたが、一向に知る人がない。途ある丘上に道士が居たのでこれに尋ねたら、先生の生地は泰安縣東二十里で歿したのは湖北であるといふ。支那人は知らぬ學者の故地に對して湖北と遁げるのが一種の安全瓣となつてゐるらしい。そのまゝに信用する事が出來ぬ。尋ね〳〵行く中に泰安城內に先生の後裔あるを知り、到著するなり直にそこに敬意を表して、先生講學の跡を尋ねたが、主人はこれを知らぬのである。「泰山遺風」といふ榜を掛け、堂々たる門戶を張りながら、先生がどこに講學の筵を張つて居られたかを知らぬとは殘念である。斯くの如くにして泰山を遊觀する間、遂に先生退居の地を知るを得なかつたが、後に聞けば、泰山の西南風景の絕佳なる溪間で、今は何の遺址もなく、その講學の建物を移したものが、府の西南なる某廟であるといふ。廟名は忘れた。

泰山へ

五嶽の一としてその名最も高く、殆んど四百餘州の各地に東嶽廟又は岱嶽廟をあらしむるまでの泰山は、支那の文教に與つて重大な關係を有する。泰山を挾んで北海を越ゆるとか、夫子泰山に登つて天下を小とするとか、兒童の時より耳に慣れた名山である。佛教との關係は、東晉の道安が竺法和と共にこれに登り、法和が感激の餘りに泣いた時、道安がこれを慰め、後に道安は支那佛教々理の最初に立つ學者となり、法和は蜀の佛教を開發する傑物となつたに始まる。同時の僧朗は山陰の神通寺に退隱して、長安の符堅が僧俗を沙汰した際に「泰山は道德の居る所、搜簡の例に非ず」とまでに言はしむる德化を施した。靈巖もまた朗公の故址である。降つては北齊の代に有名な經石谿が出來て、泰山の一名所となつてゐるから、是非一度はこゝに登攀せねばならぬ。登攀に極めて便利な山轎があるけれども、予は一度は自分の脚力によつて、これを上下し、十分に山氣に觸れたいといふので、特に山轎によらぬ事とした。

塵寰を離れてこれから泰山の靈寰に入らうといふ斗母廟にて朝食を濟ませて、いよ〳〵登山氣分を味ふ事とした。東道の支那人がうかと經石谿を往き過ぎたが爲に、更に引きもどして岐路に入り、一溪を越ゆれば、有名な經石谿が忽ちに眼前に現れた。想像したより立派な、平坦な、緩やかな勾配の花崗石らしい巨巖の面に刻せられた「金剛經」である。一應その上を渡つて檢査して往けば、割合に原のまゝの文字もあり、缺損せるものもあり、堀り深めたものもあり中には又原よりも字畫を太くしたものもある。これはまだしもであるが剝落せる部分に新に刻せるものすらある。その拓本を見て、好い文字と惡い文字とあるに不審を懷いてゐたが、實施に就いてこれを見るに及んで一切が明白となつた。何事もこれを實驗しないではならぬ事をこゝにても適切に敎へられた。この雄渾な大字が誰の手に成つたものか古來の疑問であるが、予は二三日前に徂徠山にて見た般若經と同筆と認めて北齊の冠軍將軍王子椿に相違ない斷言する。

泰山の登攀は左程に容易でもないが、然しまた左程に困難でもない。大抵の脚力あるものには、六時間內外にて絕頂を極むる事が出來る。我が筑波山より少し高い位のものであらう。而も嶮峻の場所には悉く立派な磴道があるから、大なる困難はない。男子須らく轎などに依らずして、我が脚力によつて登攀の快を取るべきである。予は初めて脚力の登攀によつて、夫子が天下を小とせる氣分、和公が人間を小とせる大觀を味ひたいと願つたのであるが、最頂に道觀のあるに聊か不滿足であつた。餘りに便利なる事は頗る峻嚴を破壞する虞がある。午後三時頃から甚しい寒冷に驚き、特に薄暮以後の寒烈は骨に徹する程であつたから、道觀のあるに大なる便利も得たが、然し心底には寒氣と戰ひ困難と鬪つて上下してこそ、初めて登岱の妙味はあれと思はざるを得なかつた。特に秦漢時代に於て封禪した名殘の石頭が、恰も置石の如くに道觀の狹い中庭を飾るのみなるに至つては、心竊かに泰山の爲に泣かされたのである。山の頸ともいふべき關帝廟の邊までは人家のあるも、道廟のあるも宜しいがそれより上の頭とも見るべき部分の、五六の道觀は泰山の爲にこれなきを希望するのは、敢て予一人のみではあるまいと思ふ。南方よりの登攀には以上の如き感想を懷いたが、北方の降路は如何にも泰山氣分を味はふに十分に距離と嶮惡と寂寥と峻嚴とがある。「維石巖々」とは能くも形容したものかゝる場所のみを通過すること四五十支里もあらうか。

餘りに低い山は展望が狹く、餘り高い山は屋望を單純ならしめる。風景の佳いのは、高からず、低からざる山に限る。また展望せられる地方が、山ばかりでも宜しくない。平地ばかりでも宜しくない。平原あり、山脈あり、村落あり、川流あり、種々の變化あるを可とする。泰山は正にこの條件に合する。一地點に立つて首を回らせば、四方を展望し得て、而して四方の風物がすべて變化に富み、宛然文章である。玉皇廟前にある無字の碑は、あたかも天地自然の文を讀破せよといふ謎の如くに思はれる。（大正十年十月）

第十二回配本

第十二輯　河北

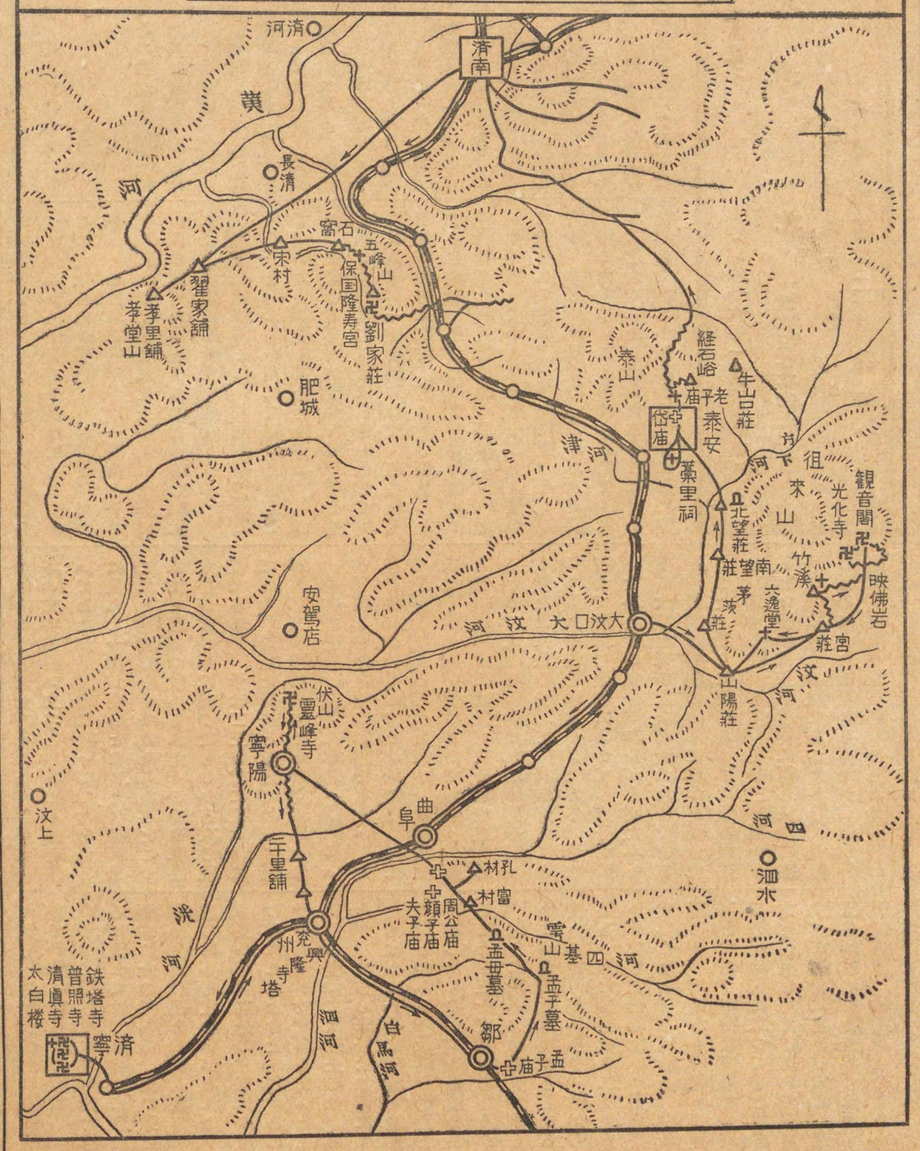
（昭和十六年一月下旬配本）

北京及び其附近

圖版部百十葉　二百圖內外

解說部百二十頁　挿畫數個

泰山附近略圖



常盤大定踏査行路